

「今、テレビは子ども達にどう見られているか？」

—小中学生 36 人インタビュー&アンケート調査」報告

BPO・青少年委員会 調査研究班

目次

本報告における「ながら視聴」「並行視聴」「非集中視聴」等の用語定義	2
調査結果の概要	4
0. 調査の目的・方法	4
1. 小中学生のメディア環境と「大切なもの」	4
2. 視聴時間と視聴時間帯、他メディア利用時間	7
3. テレビ視聴時間は何によって決まるか	8
4. どのような番組がみられているか	13
5. 視聴スタイル：集中視聴と非集中視聴	16
6. テレビの信頼性と演出に対する認識	23
7. 家族内でのテレビの位置	25
8. テレビ番組の影響：主にインタビューから	27
9. CM への関心度	29
10. テレビの空間生態学	29
11. テレビへの期待	30
12. 終章～けっきょく子どもたちにとってテレビとは何か	31
終章～けっきょく子どもたちにとってテレビとは何か（報告書全文）	33

<調査実施メンバー>

橋元良明	東京大学大学院情報学環教授
是永 論	立教大学社会学部准教授
小室広佐子	東京国際大学国際関係学部国際メディア学科准教授
吉田暁生	東京大学大学院学際情報学府博士課程
重吉知美	立教大学大学院社会学研究科博士課程後期課程
池上 賢	立教大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

本報告における「ながら視聴」「並行視聴」「非集中視聴」等の用語定義

◆「ながら視聴」と「並行視聴」

<ながら視聴>

他の生活行動(食事、身じたく等)、他メディア利用行動、勉強等をしながらテレビを見ること。日常用法やNHK放送文化研究所による「国民生活時間調査」の「ながら視聴」とほぼ同じ。本調査の「視聴スタイル」でいう「非集中視聴」の一つでもある。

「ながら視聴」でないテレビ視聴が「専念視聴」である。

<並行視聴>

「ながら視聴」の一部。今回の日記式調査で行動を記録してもらった「他のメディア利用」および「勉強」をしながらテレビを見ること。「他のメディア利用」とは、この調査の場合、「テレビゲーム」「携帯ゲーム」「パソコン」「マンガ・雑誌・新聞・本」を意味する。

「並行視聴」に伴う「個々のメディア利用行動」および「勉強」を指示する場合、「並行行動」と呼ぶ。

また、アンケート調査(問9)における「(ア)本や雑誌、マンガを読む」「(イ)テレビゲームをする」「(ウ)パソコンでEメールを読んだり、ウェブサイトを見たりする」「(エ)携帯メールを読んだり打ったりする」も「並行行動」である。

◆「視聴スタイル」「集中視聴」「非集中視聴」

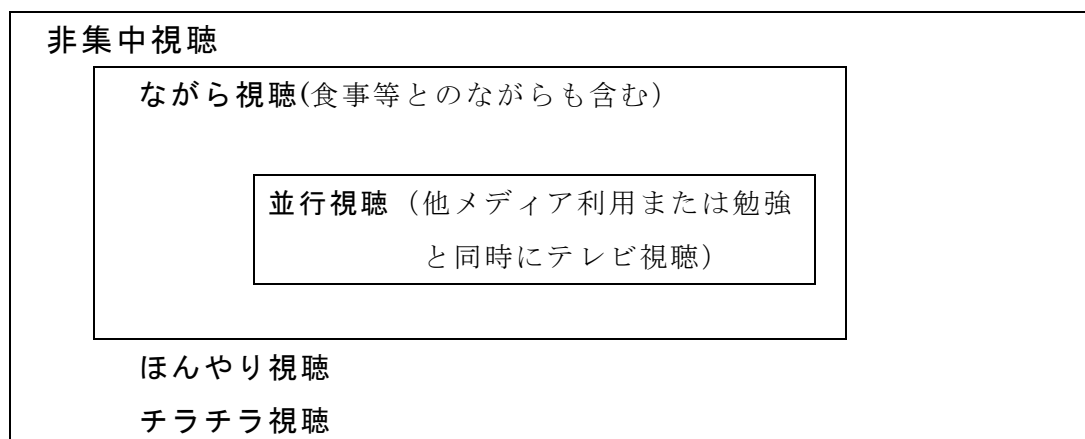
今回の調査では、日記式調査で1週間にわたり実際に見た番組をチェックしてもらった。その際、「どの程度、集中して番組を見たか」を「視聴スタイル」と呼び、以下の5種類の区別をした。

- (1)ほかのことをしないで集中してみた(集中視聴)
- (2)ほかのことはしないがぼんやり見た(ぼんやり視聴)
- (3)ほかのことをしながら見た(ながら視聴)
- (4)とくに見ようとしたわけではないがなんとなくチラチラ見た(チラチラ視聴)
- (5)録画してあとで見た(録画視聴)

このうち、(1)を「集中視聴」と呼ぶ。「集中視聴度」については5.2.1の本文参照
(2)(3)(4)を合わせて「非集中視聴」と呼ぶ。

したがって、本報告書では、「非集中視聴」の一部が「ながら視聴」になる。

「ながら視聴」「並行視聴」「非集中視聴」の概念関係を以下に図示する。



<参考>

1. 「ながら視聴」については、NHK放送文化研究所による「国民生活時間調査」でも分析されている。同調査によれば、テレビ放送開始後10年強の1965年においてすでに日本人のながら視聴率(平日)が43%との分析結果があり(『1965年度NHK国民生活時間調査』)、以降45%前後で推移していたが、95年調査以降はむしろながら率は低下の傾向にある。ただし、95年調査以降は、調査方法に変更があるため、継時的比較はできない。本報告書の調査では、「ながら視聴」は日記式調査においても数値として計測していない。

2. この調査の「非集中視聴」に若干近い概念がNHKの研究所により1969年時においてすでに「漠然視聴」という形で言及されている(NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』,2003)。ただし、この場合、「漠然視聴」とはアンケート調査上での「別に見たいと思わないものも見る」「何となくいろいろ見る」の選択肢に対する肯定回答であり、本報告書の「非集中視聴」とはずれがある。69年調査で「漠然視聴率(前記二つの回答の合計)」は29%であった。その後、2002年でも漠然視聴の比率はNHKの研究所調査では28%で大きく変化していない。

【調査結果の概要】

0. 調査の目的・方法

0.1 調査の目的

(1) 今回の調査の目的は、小学校高学年および中学生を対象に、1)子どもたちがテレビをどのような形で見ているか(テレビの視聴スタイル)、2)様々な情報メディアが普及する中で、彼らにとってテレビの重要性に変化はないのか(テレビの相対的重要性)、3)子どもたちはテレビの暴力シーンをどのように見ているか、またどのような影響を受けているか(暴力的シーンの評価、影響)、4)彼らにとってテレビは十分魅力のあるものなのか(番組の魅力)、5)情報番組等について、テレビをどの程度信頼しているのか(テレビ番組に対する信頼性)、6)演出上の「やらせ」について彼らがどう感じているのか(「やらせ」演出の認識)、等、一言で言えば「テレビと児童の具体的かかわり」について、インタビュー調査を中心に明らかにすることである。

0.2 調査の方法

- (1)調査対象は、首都圏在住の小学生高学年 12 名、中学生 24 名の計 36 名。男女は同数で、自己申告で一日に 4 時間以上テレビを見る「重視聴児童」と 1 時間以下の「軽視聴児童」が 2 対 1 の割合になるよう、調査会社モニターの児童から有意抽出した。
- (2)調査の中心は、1)半構造化インタビュー調査(あらかじめ質問項目の枠組みを決めた上でのインタビュー)であるが、2)テレビ視聴に関するアンケート調査、3)日記式記録調査も併用した。日記式調査はさらに、①インタビューに先立つ 1 週間の諸メディア利用および勉強時間について、日記式に記録することを求めた「メディア利用行動調査」と、②1 週間に実際に視聴した番組、およびその番組の見方(集中してみたか、「ながら」で見たか、誰と見たか、等)を記録させた「視聴番組記録調査」からなる。
- (3)インタビュー調査は、2006 年 10 月から 2007 年 2 月にかけて、6 回に分けて実施された。インタビューは児童 1 人ずつに対して行なわれ、時間は 1 人あたり 1 時間から 1 時間半である。インタビューは、BPO・青少年委員会委員の橋元良明、是永論の他、調査実施メンバー計 6 名が行ない、これに青少年委員会事務局の 3 人がオブザーバーとして加わった。

1. 小中学生のメディア環境と「大切なもの」

1.1 メディア環境

—中学生でケータイ、パソコン利用が当たり前の時代に

(1)パソコンの自宅所有率は 97%、「パソコンを自分で利用している」と答えた児童は 92%

であった。また、パソコンによるインターネットの利用率は調査対象児童全体の 81% で、中学生、男子においては 90%近い利用率であった。

(2)携帯電話は、全体では 61%が利用し、小中学生別にみれば、小学生でも 50%、中学生では 67%が利用。男女別にみれば、女子の方が男子より携帯電話の利用率は高い。

(3)テレビ以外にも多様な情報機器に囲まれて生活している様子が明確に示された。

表 1.1.1 主な情報機器の自宅所有と本人利用

	家にある			家がない(%)	平均台数(台) (家にある場合)
	自分も利用(%)	自分は非利用(%)	(小計)		
テレビ	100.0	0.0	100.0	0.0	2.3
VHS ビデオ	75.0	25.0	100.0	0.0	1.4
DVD レコーダー	74.3	5.7	80.0	20.0	1.2
パソコン	91.7	5.6	97.3	2.8	1.5
テレビゲーム	72.2	16.7	88.9	11.1	2.6

表 1.1.2 携帯電話、PC インターネットの利用率 (数値は%)

	全体	小学生	中学生	男子	女子	TV 重視聴児童	軽視聴児童
携帯電話利用率	61.1	50.0	66.7	55.6	66.7	66.7	50.0
パソコンインターネット利用率	80.6	66.7	87.5	88.9	72.2	75.0	91.7

1.2 大切なメディア

—男子、中学生ではすでにテレビよりケータイ

(1)「一番大切なメディア」として、全体では「テレビ」と答えた児童 42%、「携帯電話」と答えた児童 39%いた。

(2)小学生／中学性別にみれば、中学生では一番大切なものとして「テレビ」(38%) より「携帯電話」(42%) をあげる児童の方が多く、また、男女別にみれば、男子では「テレビ」(33%) より「携帯電話」(39%) をあげる児童の方が多かった。

(3)携帯電話を利用している児童では、かなりの差で「テレビ」(32%) より「携帯電話」(64%) を大切なメディアと答えた。

(4)「重視聴児童」は 42%が一番大切なメディアとして「携帯電話」をあげ、その比率は「テレビ」の 38%を上回った。

(5)テレビが自宅に 3 台以上ある児童の 62%が一番大切なメディアとして「携帯電話」をあげ、テレビをあげたのは 8%に過ぎなかった。

(6)「重視聴児童」と「自宅にテレビが 3 台以上ある児童」において、携帯電話の方がテレビより大事であると答えているのは、彼らの在宅自由時間が長いこと、テレビ以外のメディアを利用する機会も多く、とくに携帯電話の利用率も高いことから、多様なメディア

ア環境の中で相対的にテレビの重要度が低くなっているからだと推察できる。

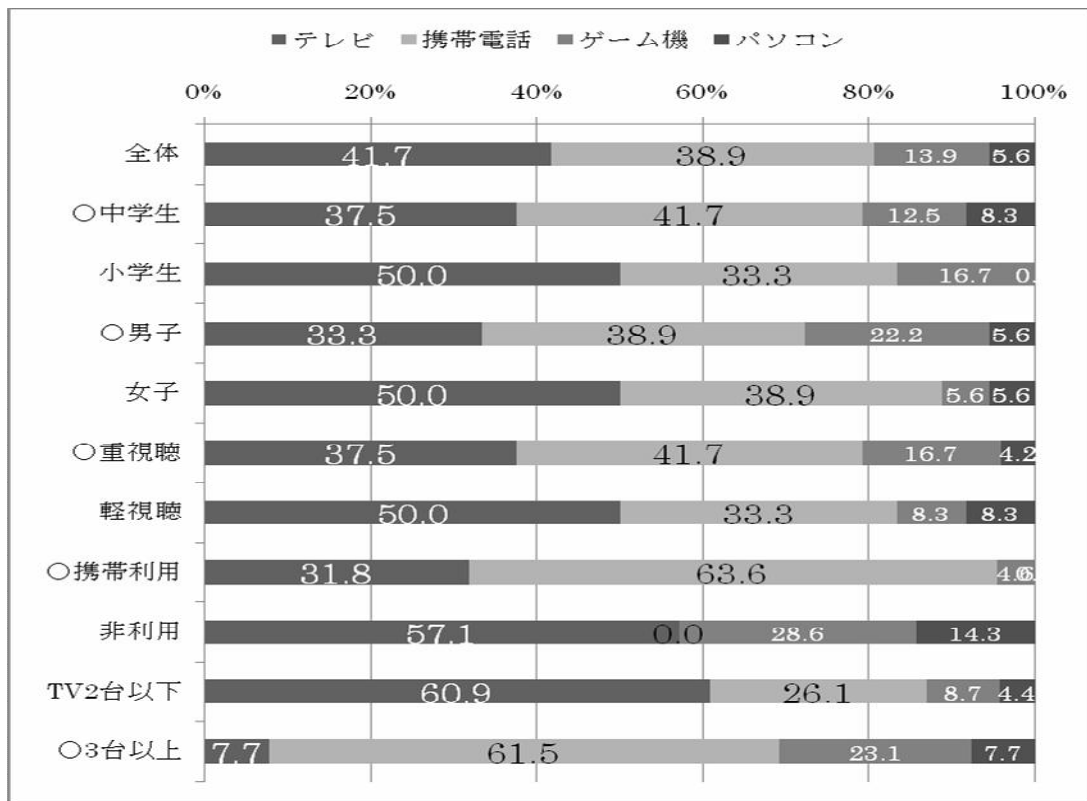


図 1.2.1 あなたにとって一番大切なメディア(事前アンケート) 数値は%
○印は「携帯電話」が「テレビ」を上回った対象

(7)「一番大切なメディア」についてインタビューをまとめてみれば以下のとおりである。

a)携帯電話については次のような積極的な理由があげられていた。

- ①友人との連絡、待ち合わせ等に不可欠
- ②携帯電話があれば、コミュニケーションだけでなく、テレビや動画も見られ、情報サイトにもアクセスでき、ゲームもでき、小説も読め、音楽も聴け、多機能である。
- ③コンパクトで持ち運びが可能。寝っ転がっていても使える。

b)テレビを一番にあげた理由の多くは、他のメディアを1番にあげる積極的な理由がない、というケースが多かった。とくに携帯電話を持っていない、あるいはあまり使わないから、テレビを選ばざるを得ない、という児童がいた。その他、少数の意見で「いつも見ているから」「情報入手手段として重要」という理由を挙げる児童もいた。

(8)まとめると、アンケート調査からは、中学生、男子、携帯電話利用者では、大切なメディアとしてテレビより携帯電話が選択されている。この先、さらに携帯電話利用開始年齢が下がるにつれ、「大切なメディア」として、一層テレビの位置は下がり、携帯電話を重要視する傾向が顕著になる可能性も大きい。

2. 視聴時間と視聴時間帯、他メディア利用時間

2.1 テレビ視聴時間

男子より女子(ただし差は小さい)、小学生より中学生が長い時間テレビを視聴していた。

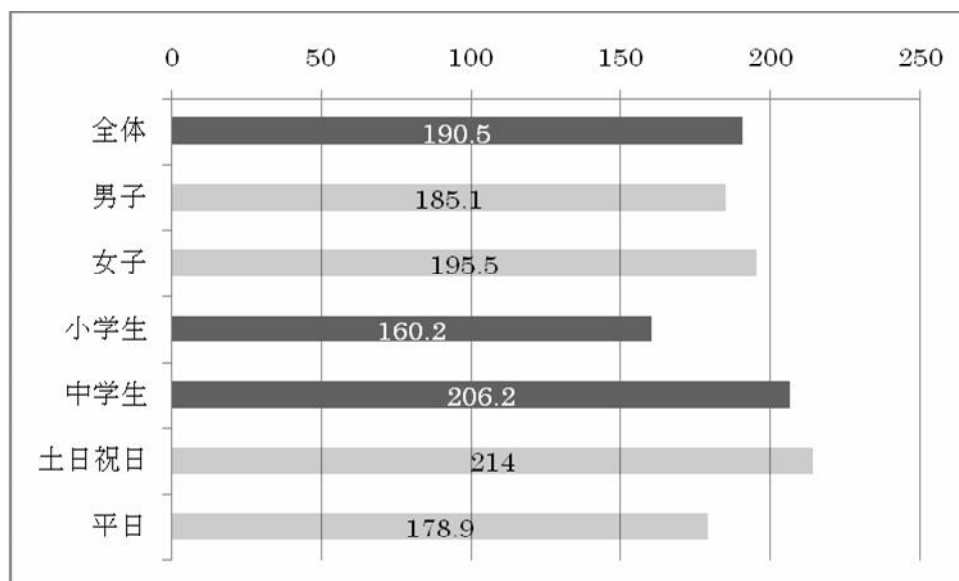


図 2.1.1 日記式調査によるテレビ視聴時間 (単位:分)

2.2 いつテレビは見られているか

一夜 11 時近くになっても小学生の 20%がテレビを見ている

(1)小中学生別にみた場合、注目すべきは夜の 10 時 45 分から 11 時まででも、小学生の 20% 中学生の 46%がテレビを視聴していることである。

(2)夜 11 時以降のテレビ視聴については、毎週決めて特定の番組を見るというより、とくに何を見るときもなく漠然と見続ける児童が多い。その際、家族はほとんど注意していない。

(3)夜の 11 時前後でも、テレビを見ている小中学生が少なからずいる状況で、「児童・青少年への配慮」という側面で、夜間の番組の内容も再考の余地がある。

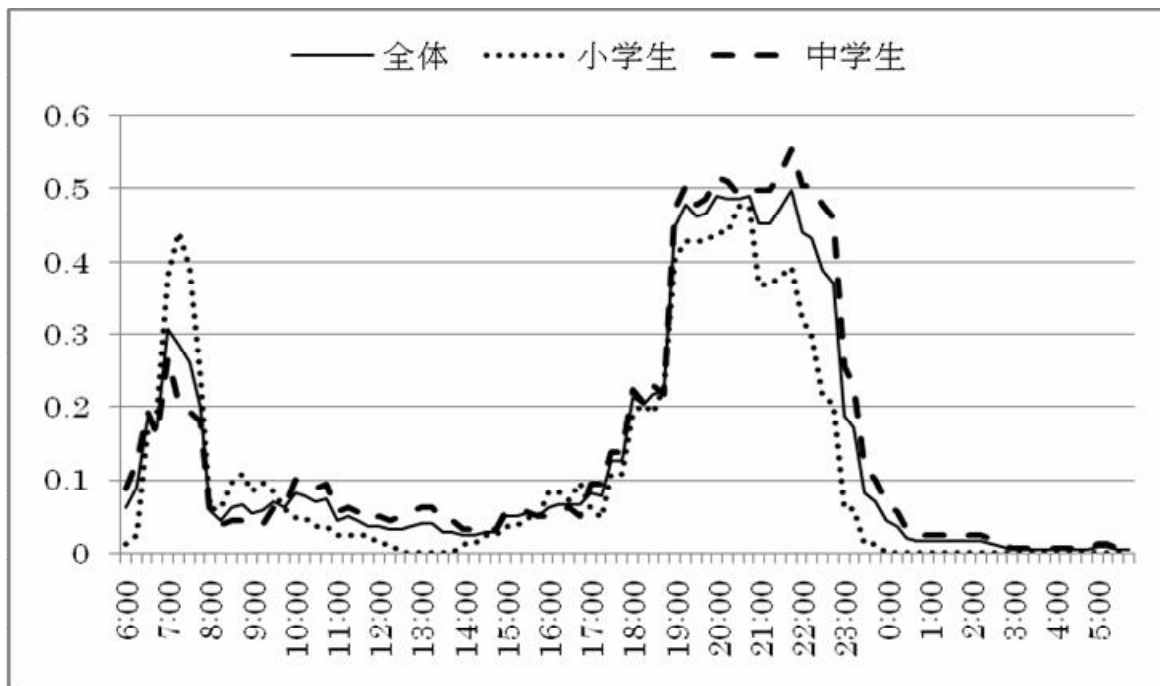


図 2.2.2 時刻別テレビの接触率（小中学生別）

2.3 日記式調査からみた他メディア利用時間

—テレビをよく見る子ほど、携帯電話をよく使い、勉強時間が短い

(1)日記式調査で、テレビ視聴以外に調査した「テレビゲーム」「携帯ゲーム」「パソコン」「携帯電話」「マンガ、雑誌、新聞、本」「勉強（塾、学校を除く）」の6項目では全体平均、行為者平均とも携帯電話が最も長く利用されている。全体の平均で44分であり、行為者に限定すると140分利用されている

(2)「テレビ視聴時間」と「携帯ゲーム」「携帯電話」「マンガ・雑誌・新聞・本」とは正の相関があり、テレビをたくさん見る児童ほど、携帯ゲームで長く遊び、携帯電話をよく利用し、マンガ等を読む時間も長い。とくに、テレビ視聴時間と携帯電話の利用時間は非常に強い正の相関がある。一方、テレビ視聴時間と「勉強時間」は負の相関がある。

表 2.3.3 テレビ視聴時間と他メディア利用時間、勉強時間との相関

	テレビゲーム	携帯ゲーム	パソコン	携帯電話	マンガ等	勉強
相関係数	0.010	0.127	0.015	0.496	0.175	-0.154
有意水準	n.s.	*	n.s.	***	**	*

有意水準 ***:p<.001 ** :p<.01 * :p<.05 n.s.:5%未満の危険率で有意な関連なし

3. テレビ視聴時間は何によって決まるか

3.1 在宅時間、クラブ・塾・習い事などとの関係

(1)家にいる時間が長い子どもほどテレビをよく見る。

(2)学校のクラブ活動と学習塾が視聴時間を大きく制限する。

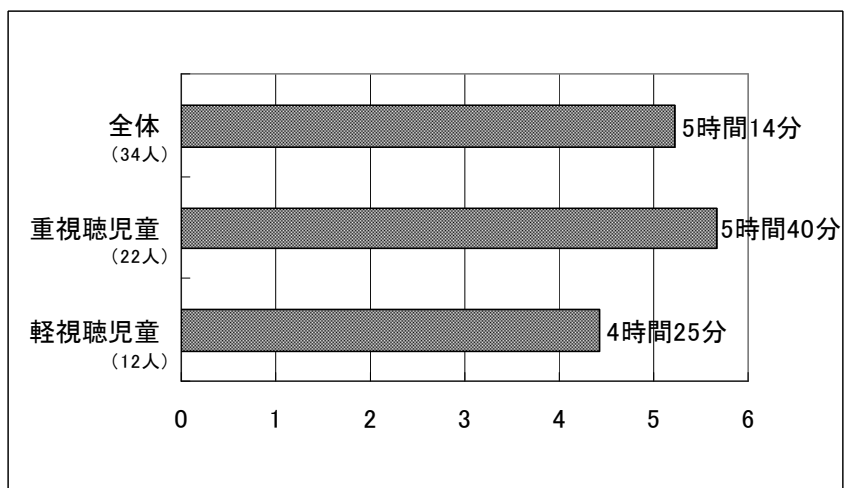


図 3.1.1 重視聴児童／軽視聴児童ごとにみた平日在宅時間

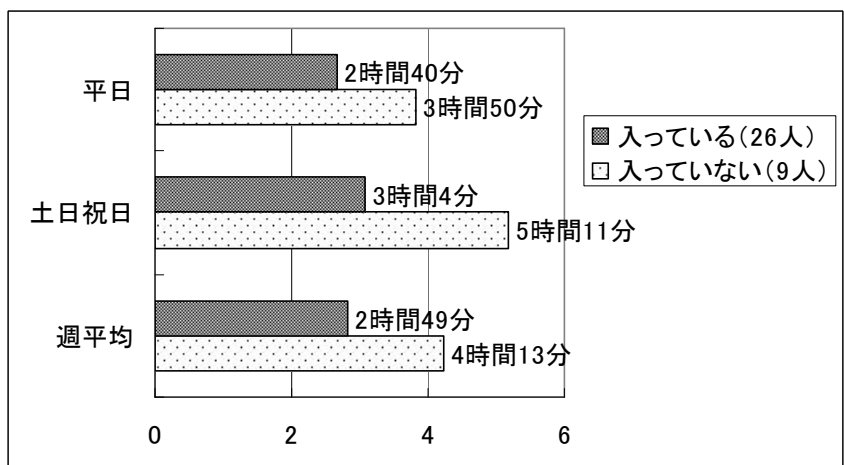


図 3.1.3 学校のクラブ活動の参加の有無別の視聴時間

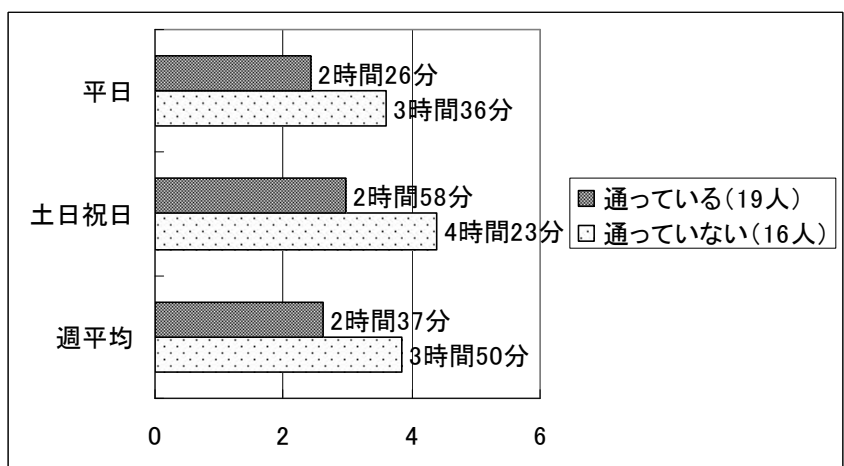


図 3.1.4 通塾の有無別の視聴時間

(3)「成績がいいほどテレビを見ない」という関係は塾に通っていない場合にのみみられず、塾に通っている場合は逆に「成績がいいほどテレビを見る」という関係がみられる。学校のクラブ活動においても同様で、参加していない場合は「成績がいいほどテレビを見ない」が、参加している場合は「成績がいいほどテレビを見る」。

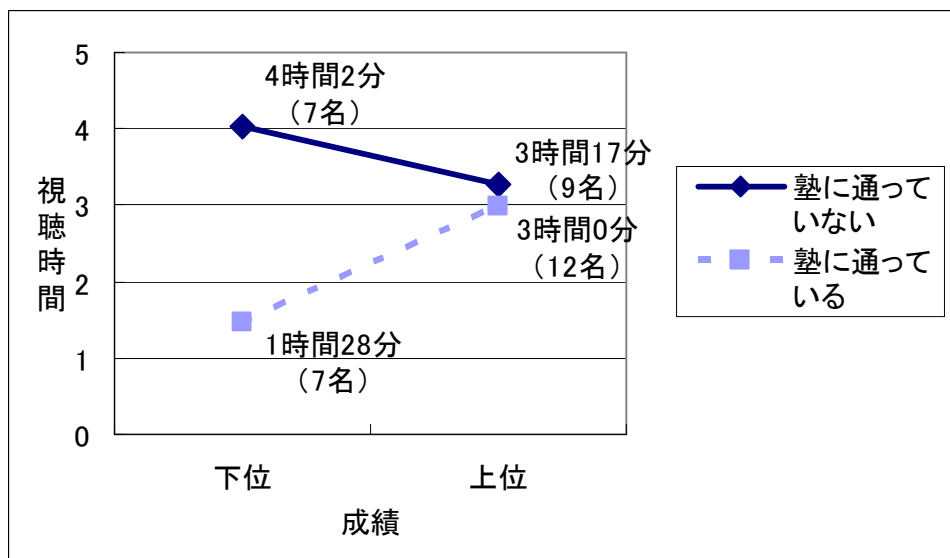


図 3.1.7 成績・通塾別の平日視聴時間

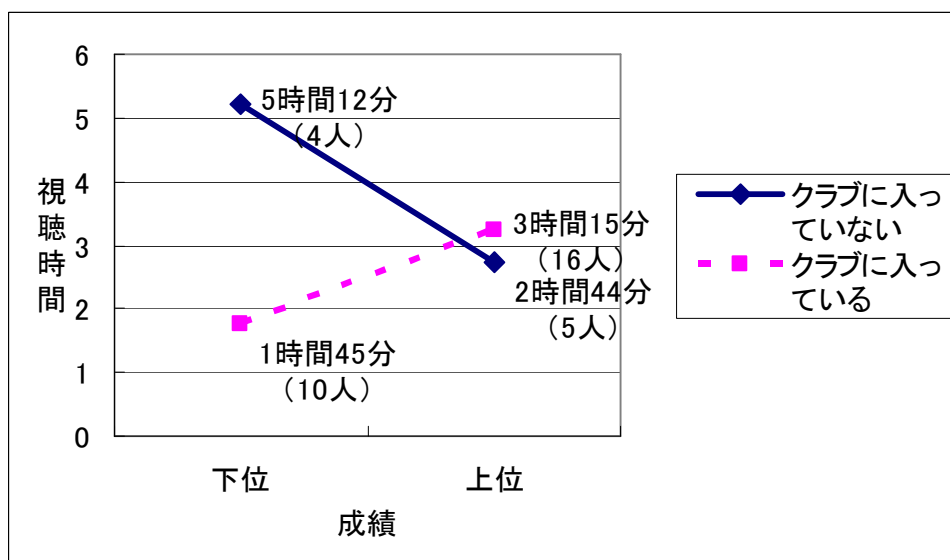


図 3.1.8 成績・クラブ活動参加別の平日視聴時間

3.2 家庭環境との関係

—在宅時間とともに大きな影響

(1)家にあるテレビの台数が増えるにしたがって視聴時間が長くなる傾向がある。

(2)家族がテレビを見ると、つられて見る。

a)父親・母親の視聴時間が長いほど、子どもの視聴時間も長い。母の影響がやや強い。

b)祖母・兄・弟・妹の視聴時間が長いほど、子どもの視聴時間は長くなる。特に、弟・妹という年下の兄弟の関係が顕著である。ただし、姉の視聴時間に限っては、長いほど子どもの視聴時間は短い。

(3)テレビ視聴を規制するルールがあれば視聴時間は短くなる。同様に、母から「もっと勉強しなさい」と注意があるほど子どもの視聴時間は短い傾向にある。

(4)読書をあまりしない子どもほど視聴時間が長くなる。

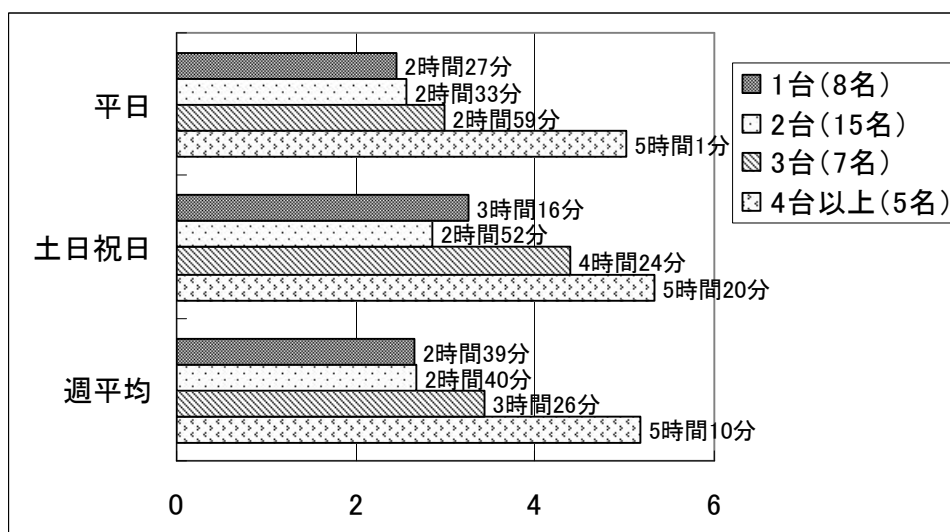


図 3.2.1 テレビ台数ごとにみた視聴時間

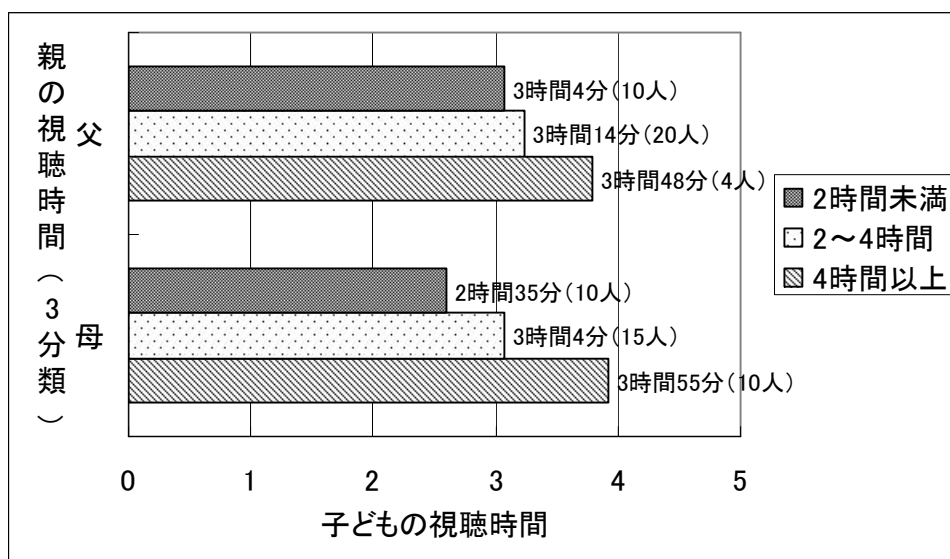


図 3.2.2 親の視聴時間ごとにみた子どもの視聴時間 (週平均)

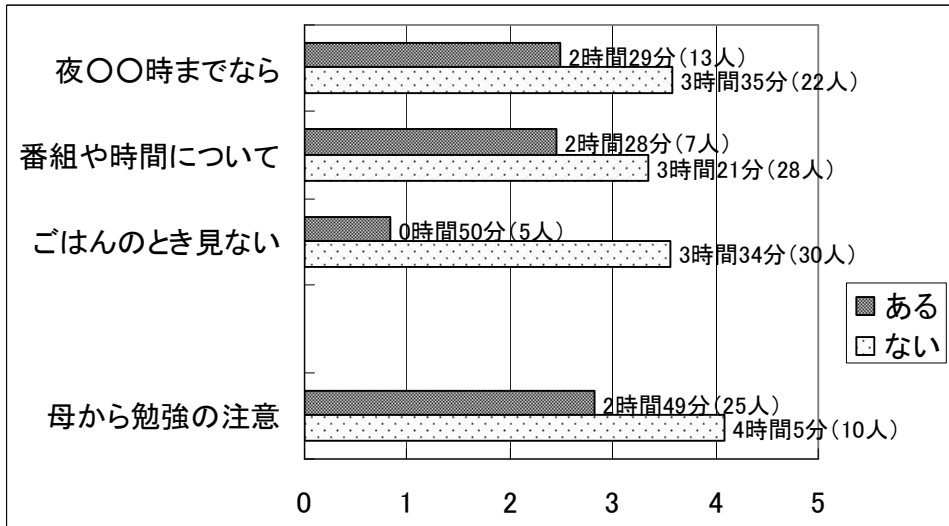


図 3.2.4 ルールの有無、および勉強の注意の有無ごとにみた視聴時間（週平均）

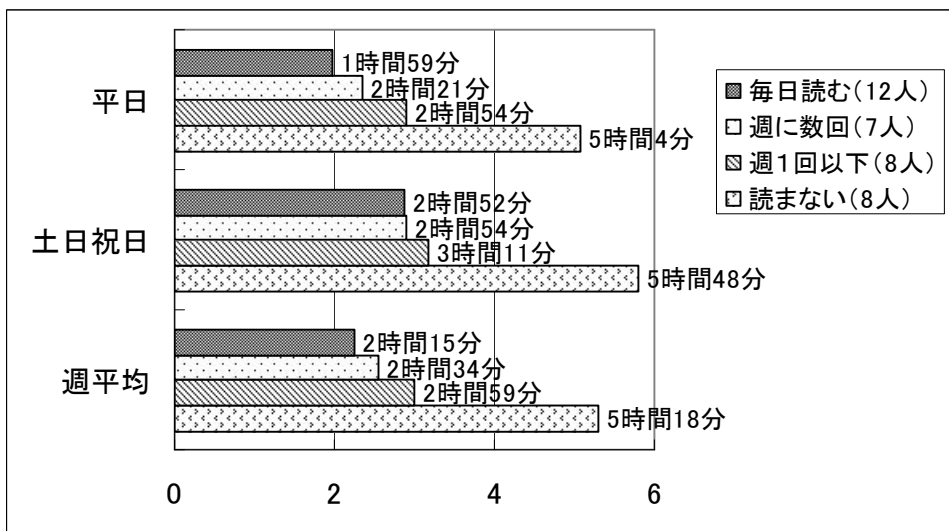


図 3.2.5 読書の頻度ごとにみた視聴時間

3.3 テレビを見ない子はどういう子か（インタビュー調査から）

3.3.1 軽視聴児童がテレビを見ない主な理由

軽視聴児童に焦点をあててテレビを見ない理由を尋ねると、部活動、習い事やケータイ、ゲームに忙しいからという回答が得られた。

3.3.2 家にいるのにテレビを見ない理由①

部活動や習い事に忙しく在宅時間が短いと、家でテレビを見る時間が限られる。しかし、在宅時間が長いにもかかわらずテレビを見ない主な理由は、家族がテレビをつけっぱなしにする習慣がなく、家庭環境としてテレビがついている時間が少ないことによる。中には、

親から視聴時間の総量規制や夜の時間制限など厳しいきまりが定められている家庭もあり、子どもはそれを順守している。

3.3.3 家にいるのに見ない理由②

家にいながらテレビを見ないもう一つの理由は、ケータイ、ゲーム、パソコンなどのテレビ以外のメディアに関心に移ったから。

3.3.4 視聴時間の変化

現在テレビをあまり見ない子どもたちがテレビを見なくなったきっかけは、受験勉強、クラブ活動を始めたといった生活環境の変化があげられた。

3.3.5 テレビに対する評価

軽視聴児童のテレビに対する評価は、決して悪くない。「テレビはつまらない」とか「番組がくだらない」というテレビに対する批判をする子はきわめて少なかった。現在のテレビ番組に明確な不満があるというより、テレビ以外の理由によりテレビ離れをおこしている。

表 3.3.1 テレビを見ない主な理由

クラブ活動や習い事で忙しい
ケータイ、パソコン、ゲーム
家庭環境（禁止、習慣）
自分にチャンネル選択権がない
続きがわからない
関心なし・不自由しない

4. どのような番組がみられているか

4.1 視聴されているジャンル、番組

バラエティー、ドラマ、アニメが人気

(1)日記式調査の結果から、子どもたちにもっともよく視聴されているのが、バラエティー番組であった。そのほか、アニメ、ドラマ、ニュース系番組、情報・討論番組がよく見られていた。

(2)バラエティー番組は中学生の方が視聴していた。アニメについては、小学生の方が視聴していた。男女別では、女子の方が男子よりもドラマをよく視聴していた。

(3)「バラエティー」では『はねるのトびら』『めちゃ2イケてるッ!』『エンタの神様』などが実際によく視聴されている。視聴理由は以下の通り。

- a) 『エンタの神様』については主に、出演している芸人を目当てに視聴しているという回答が多かった。
- b) 『はねるのトびら』については、単に「おもしろい」という回答が多かった。

- c) 『めっちゃ2イケてるッ!』については、番組の企画が面白いという回答が多かった。
- (4)アニメでは『ドラえもん』『ちびまる子ちゃん』『サザエさん』などがよく視聴されていた。視聴理由としては話の面白さが挙げられた。また、兄弟など家族に随伴して視聴しているという傾向が見られた。
- (5)ドラマでは『たったひとつの恋』と『14才の母』について友人と話題になることや、出演者に興味を持つことが、視聴する理由として挙げられていた。『のだめカンタービレ』については、「音楽」を取り扱っている番組であることも視聴理由として挙げられていた。
- (6)ニュース系番組は、生活習慣として、朝食や学校の支度をする中で、BGMのように視聴されていた。

表 4.1.1 視聴された番組ジャンルの延件数／平均視聴本数

ジャンル	番組数	延件数	平均視聴本数			
			小学生	中学生	男子	女子
バラエティー	117	307	6.3	9.7	7.9	9.1
アニメ	59	143	6.4	2.8	4.6	3.3
ドラマ	42	96	2.2	2.9	1.6	3.8
ニュース系番組	22	70	1.4	2.2	2.2	1.7
情報・討論番組	31	56	1.3	1.7	1.6	1.5
音楽	10	26	1.0	0.6	0.4	1.1
映画	12	19	0.2	0.7	0.7	0.4
スポーツ番組	8	12	0.4	0.3	0.3	0.3
ドキュメンタリー	6	6	0.3	0.1	0.1	0.2
教育番組	1	1	0.0	0.0	0.0	0.1
不明	2	2				
合計	310	738				

※1 「バラエティー」には「お笑い番組」「クイズ番組」「バラエティー番組」「旅行・紀行番組」「料理・グルメ番組」が含まれる。

※2 日記式調査において「TOKYO MX」を視聴したと欄外に記載されていたが、番組名は不明。

※3 平均視聴本数は「延件数」を各属性の人数で割ったものである。

表 4.1.2 実際に視聴されていた番組

ジャンル	接触件数	番組	局	曜
バラエティー	13	はねるのトびら	C X	水
	12	めっちゃ2イケてるッ! (SP含む)	C X	土
	10	エンタの神様	N T V	土
	9	脳内エステ IQサプリ	C X	土
	8	笑っていいとも増刊号	C X	日
	8	いきなり!黄金伝説	A N B	木
	7	行列のできる法律相談所 (SP含む)	N T V	日
	7	水10! ココリコミラクルタイプ	C X	水
	7	Qさま!! (SP・傑作選)	A N B	月
アニメ	8	ドラえもん	A N B	金
	7	ワンピース	C X	日
	7	ちびまる子ちゃん	C X	日
	7	サザエさん	C X	日
ドラマ	8	たったひとつの恋	N T V	土
	6	14才の母	N T V	水
	6	セーラー服と機関銃	T B S	金
	6	のだめカンタービレ	C X	月
	6	Dr. コトー診療所	C X	木
ニュース系番組	14	めざましテレビ	C X	帯※
	8	ズームインSUPER	N T V	帯
	8	スーパーニュース	C X	帯
情報番組	8	世界まる見え!テレビ特捜部	N T V	月
	7	ザ!世界仰天ニュース	N T V	水
音楽番組	9	ミュージックステーション	A N B	金

※ 「帯」は月曜日から金曜日まで同じ時間帯で放送される帯番組を示す。また、週に何回視聴されても視聴件数は1として集計している。

4.2 多様な番組視聴

—視聴要因も多様化

小中学生たちが視聴する番組は多様化しており、特定の番組に人気集中する傾向は顕著には見られない。また、視聴する理由も多様である。

4.3 趣味的視聴

—特定のジャンル・テーマへのこだわりも

自分の趣味や嗜好に関連する番組を集中的に視聴する、いわば「趣味的視聴」が小中学生の段階から、数としては少ないものの存在する。

4.4 テレビ番組情報はどこから得るか？

—番宣、新聞テレビ欄、テレビ雑誌が主要情報源

- (1) テレビ番組に関する番宣は視聴番組決定の要因として大きな位置を占めているようだ。
- (2) どのような番組が放送しているのかを知る手段として新聞のテレビ欄は番宣について一般的。
- (3) テレビ雑誌の利用のされ方は、新聞のテレビ欄とあまり変わらない。
- (4) 新聞のテレビ欄、およびテレビ雑誌は視聴のきっかけにとどまっている。
- (5) 友人からの情報源はあくまでも副次的。
- (6) インターネットは、情報源としてあまり利用されていない。

4.5 友だちとのコミュニケーションにおける位置づけ

—テレビの話は出るが、「ついていけなくてもかまわない」

- (1) 自分が面白いとも思わないのに他の理由でよく見ることはなかなかない。「(アンケート調査で質問した) よく見る3番組」中、「面白いわけではないが友人とのあいだで話題になるから見ている番組」はわずか12%だった。
- (2) テレビの話題についていけないと困ると感じているのは36人中6人と少なかった。

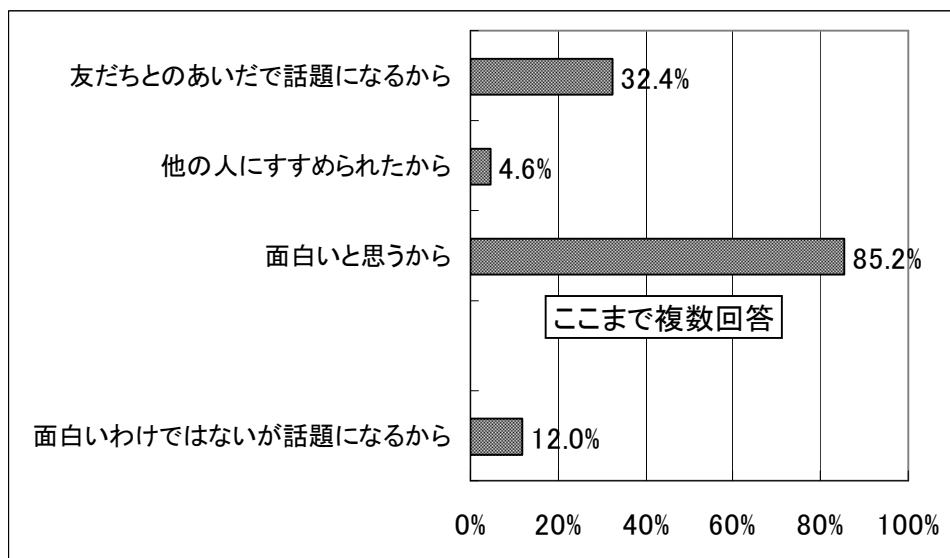


図 4.5.1 よく見る上位3番組を見る理由

5. 視聴スタイル：集中視聴と非集中視聴

5.1 視聴スタイル全般

—非集中視聴の占める割合が高い

- (1) 全体では非集中視聴の占める割合が2倍以上を占めている。
- (2) 女子の方が集中して見る番組の占める割合が高い傾向がうかがえる。

(3)中学生の方が非集中視聴の占める割合が高くなっている。

(4)重視聴児童の方が平均的にはそれぞれの番組を集中して見る割合が高い

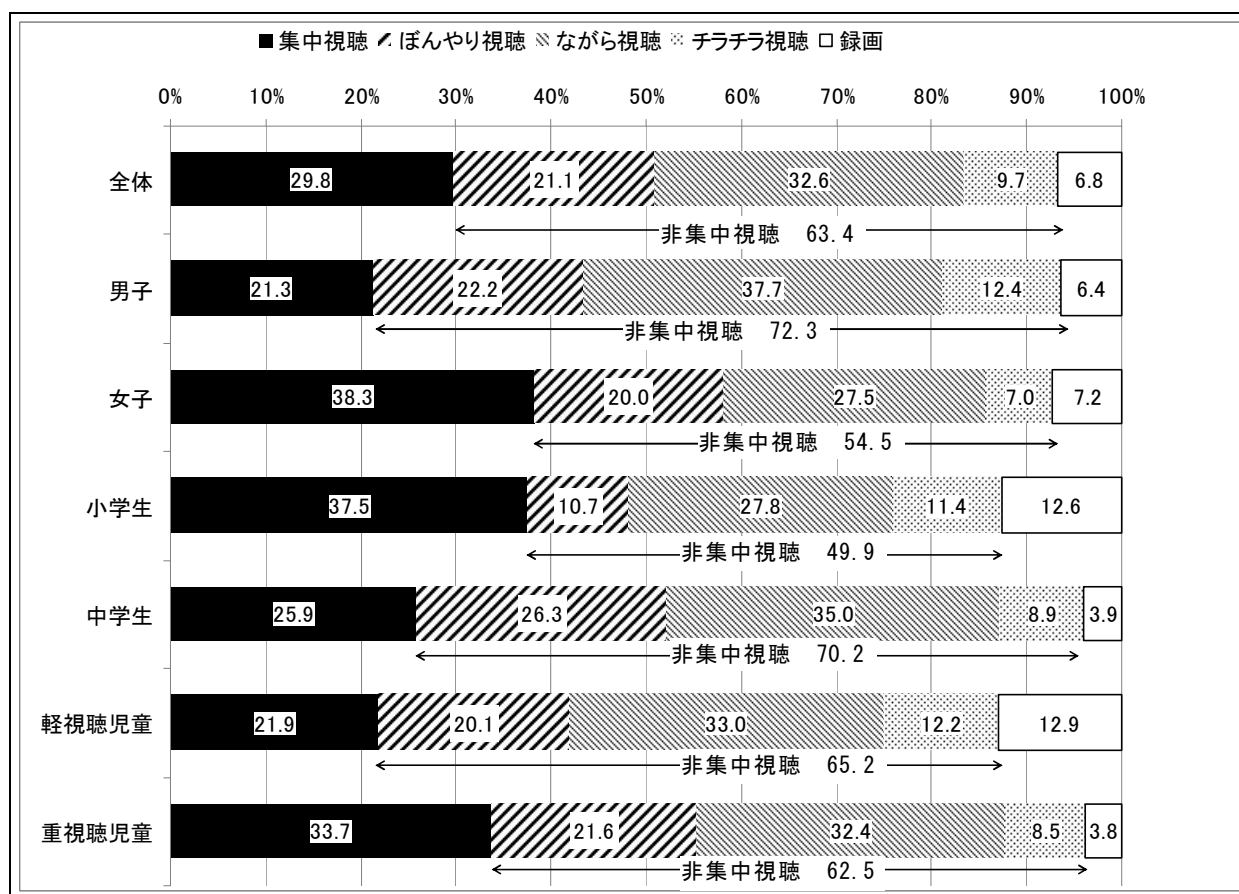


図 5.1.1 個人の視聴番組全体数に占める各視聴状態の割合（平均）

5.2 番組ジャンルと視聴スタイル

5.2.1 視聴スタイル

番組のジャンルによって視聴スタイル（集中視聴、ながら視聴、ぼんやり視聴、チラチラ視聴、録画）が異なっている。

5.2.2 ジャンル別集中視聴度

(1) 視聴者がどれくらい集中してテレビ番組を見たかを表す指標として番組あたりの「集中視聴度」を設定し算出した。集中して見た番組は 4.0、ぼんやり視聴とながら視聴は 2.0、チラチラ視聴は 1.0、録画は 3.0 として算出した結果、番組全体の平均集中視聴度は、2.61 であった。

(2) ドラマとアニメの集中視聴度が高く、それに比べて、視聴された延件数の最も多かったバラエティーは集中視聴度が低かった。ニュース系番組の集中視聴度は低く、ニュース番組は集中して視聴されていない。

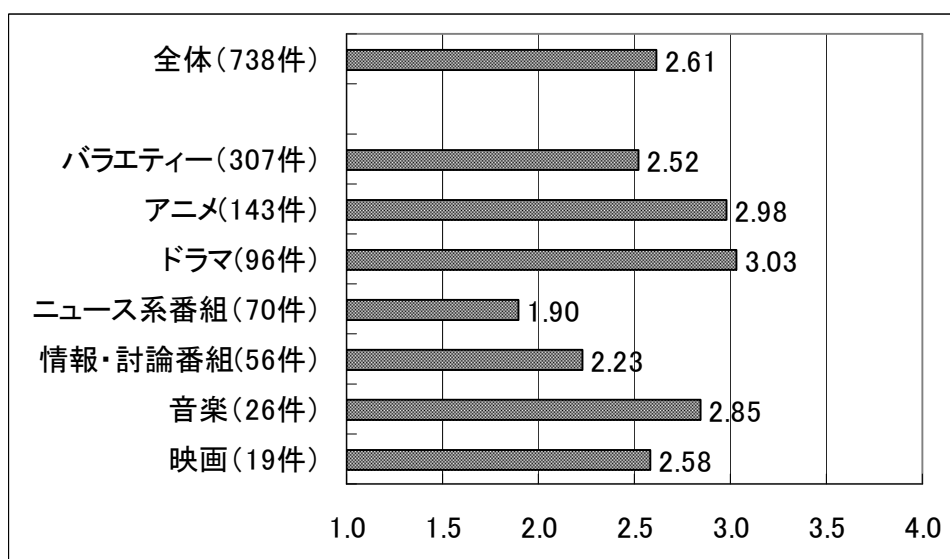


図 5.2.2 ジャンル別集中視聴度

5.2.3 ドラマとアニメとバラエティー

- (1) バラエティー番組は、好きな芸人が出演しているときだけ熱心に見たり、お気に入りの特定のコーナーだけ見てあとはテレビをつけたまま何か別のことをやっている様子がインタビューでしばしば語られた。
- (2) アニメは集中視聴度が高いが、夕方の食事の時間帯と重なると「ながら視聴」の傾向がある。

5.2.4 ニュース系番組

ニュース系番組は、他メディア利用などの「並行視聴」の事例はほとんど見られず、食事との「ながら視聴」が大半を占めた。

5.3 視聴率と集中視聴

- (1) 集中視聴度と視聴率の関係を、番組ジャンル別に調べたところ、バラエティー番組の視聴率と集中視聴度の関連は示されなかった（相関係数は-0.08）。
（視聴率は調査対象期間の平均視聴率、データはビデオリサーチ・世帯視聴率）
- (2) アニメについては、同じアニメといえども番組によって視聴スタイルはさまざまに分かれており、アニメ全般を通してみると、視聴率と集中視聴度の関係はみられなかった（相関係数は-0.19で、傾向的には負の関係がみられた）。
- (3) ドラマは全般的に集中視聴度が高いジャンルであるが、平均視聴率と集中視聴度の相関係数が 0.36 となり、正の関連がみられた。
- (4) 全ジャンルを通してみると、視聴率と集中視聴度には関連がみいだせなかった（相関係数は 0.14）。すなわち、視聴率が高いからといって必ずしも視聴者がテレビにくぎ付けに

なっているわけではなく、また、視聴率が低くても、一部の視聴者が集中して見ている番組もある。

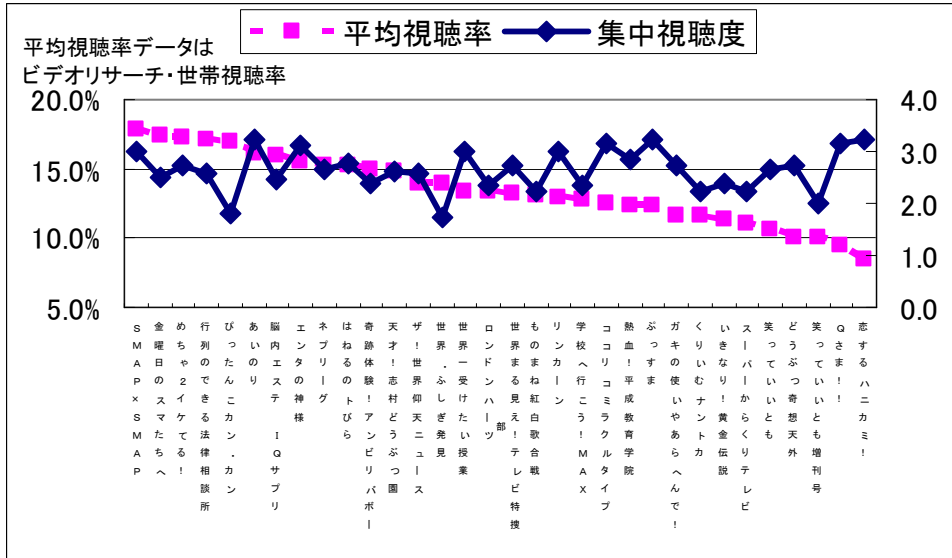


図 5.3.1 バラエティー番組の視聴率と集中視聴度

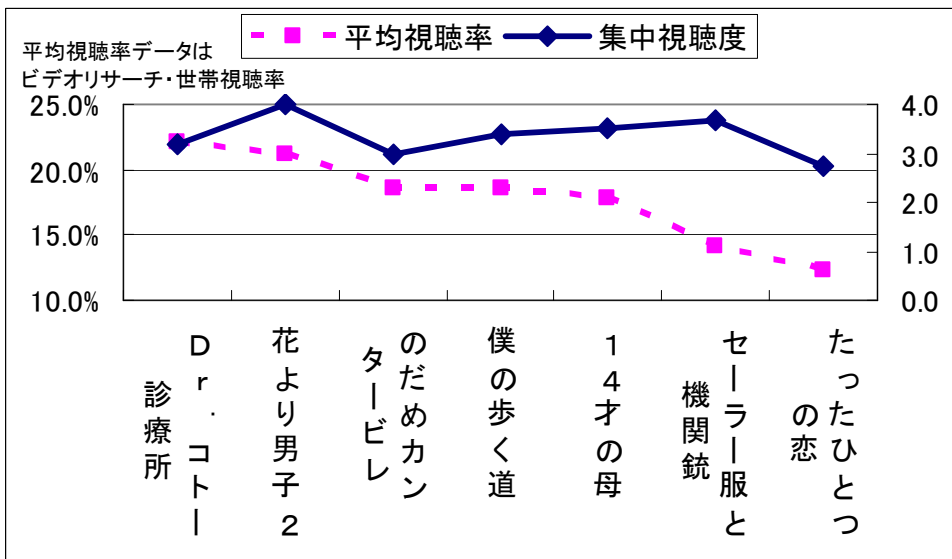


図 5.3.3 ドラマの視聴率と集中視聴度

5.4 集中視聴度（個人別）

(1) 一人の子どもがどれくらい番組を集中して見る傾向があるかを調べるために、子ども個人別の「集中視聴度」を算出し、それに基づき、子どもの集中視聴度と視聴時間の関係をクラスター分析した。その結果、子どもの集中視聴度と視聴時間の関係から、子どもを4つのタイプ（「短時間・低集中型」「短時間・高集中型」「長時間・低集中型」「平均型」）に分類できることがわかった。

- (2) 「短時間・低集中型」の子どもは、テレビへの関心が薄く、視聴スタイルも「ぼんやり」「ながら」「チラチラ」視聴が多くなり、集中視聴度も低くなる傾向がある。
- (3) 一方、人数は少ないものの「短時間・高集中型」の子どもは視聴時間がきわめて短いが高い集中度で視聴している。
- (4) 「長時間・低集中型」に見られるような、特に視聴時間の長い子どもの集中度は低い傾向にある。彼らのインタビューからは、積極的に番組を見ようという姿勢より、むしろ、ただテレビがついているという「つけっ放し」が常態化している様子がうかがえる。

表 5.4.1 集中視聴度と視聴時間のクラスター分析

群	視聴時間	集中視聴度	人数	記号
短時間・低集中型 (I)	1時間13分	2.12	11	◆
短時間・高集中型 (II)	0時間31分	3.75	2	■
長時間・低集中型 (III)	5時間50分	2.51	9	▲
平均型 (IV)	3時間24分	2.85	13	×

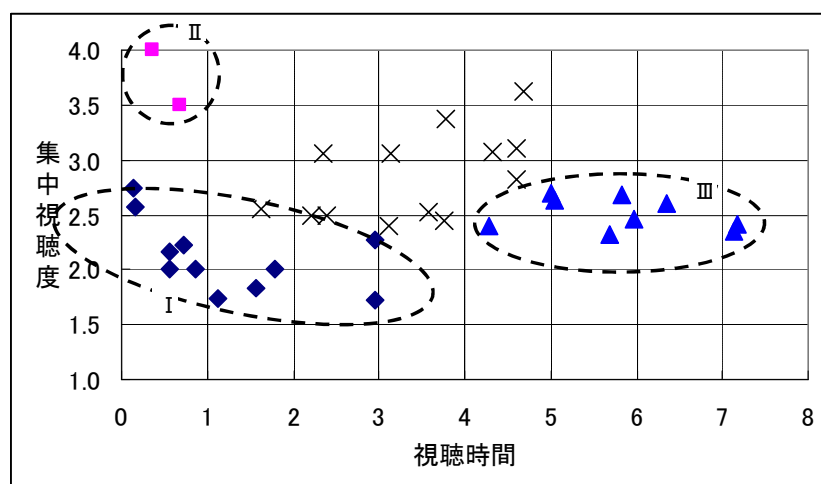


図 5.4.1 集中視聴度と視聴時間（日記式調査による・週平均）

5.5 並行視聴・並行行動

5.5.1 並行視聴・並行行動

—本や雑誌・マンガ、携帯電話とともに行われる並行視聴

- (1) アンケート調査によれば、携帯電話と活字（マンガ）というメディアによってテレビとの並行視聴が行われていることが明らかになった。
- (2) 携帯電話では一緒に同じ番組を視聴するきっかけになる例や、意見交換をするといった例も見られた。ただし、テレビを見ながら行うメールの内容とテレビの内容は関係がないという回答が多かった。
- (3) 視聴時における並行行動については、必ずしも一つのメディア利用および行動に限られ

るわけではない。

(4)軽視聴児童では、並行視聴自体も親によって禁止されているというケースも見られ、視聴時間が制限されている分、「ながら」をせずに集中して見るといった傾向が見られた。

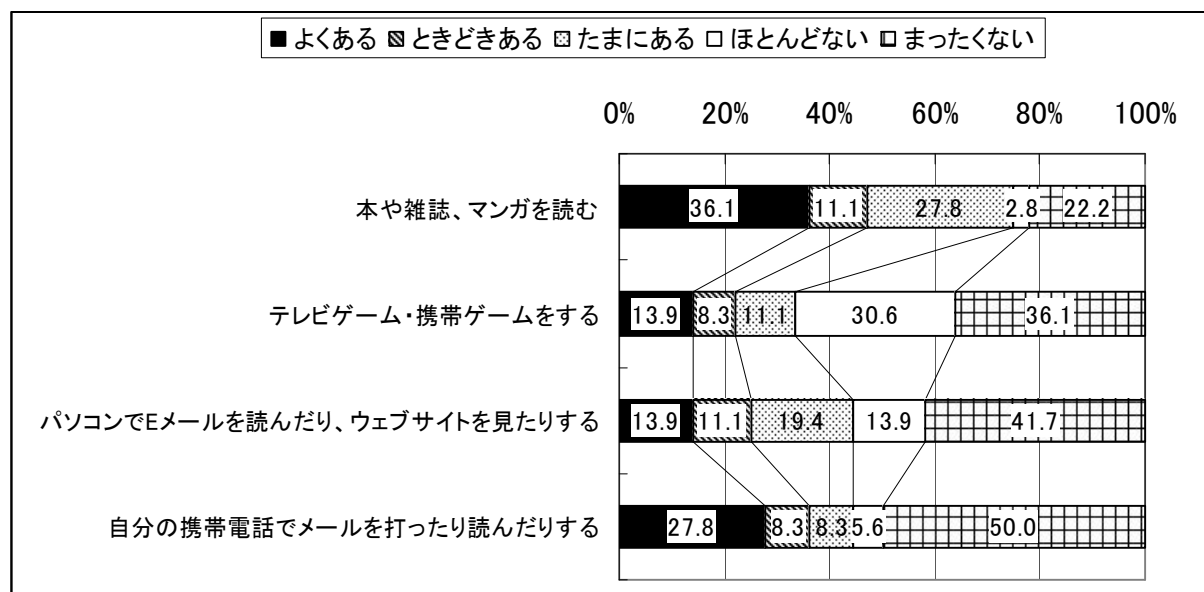


図 5.5.1 アンケート調査における並行行動 (%)



図 5.5.2 日記式調査における「並行行動」の例 (ID3 中1 女子 重視聴)

5.5.2 日記式調査から見た並行視聴・並行行動

—女子における携帯電話が「ながら視聴」の中心、勉強との「ながら」は少ない

(1)並行視聴が行われる並行行動として最も顕著なのは、携帯電話。

- (2)女子における携帯電話の並行時間率が最も高い。
- (3)「ながら視聴」としての勉強は非常に行われにくい。
- (4)テレビと携帯電話を利用した後で、勉強を単独で行う傾向が見られた。
- (5)自宅での勉強時間が長いほど、テレビ視聴に対して何らかの並行行動を行う率が高くなる。
- (6)勉強はあくまでテレビ視聴とは別の行動として単独に行われている。
- (7)テレビと携帯電話の並行視聴が児童層に強く見られる行動であった。

表 5.5.1 日記式調査によるテレビ視聴に対する並行行動の平均値

並行行動 (テレビ視聴と…)	並行時間 (分)	並行時間率 (%)	N	該当件数
(1)テレビゲーム	0.0	0.0	245	0
(2)携帯型ゲーム	6.0	2.2	245	20
(3)パソコン	3.6	1.1	245	11
(4)携帯電話	24.5	7.6	245	40
(5)マンガ、雑誌、本等	7.2	2.6	245	24
(6)勉強	1.7	0.8	245	14
(1)～(6)のいずれかと	40.7	13.6	245	82

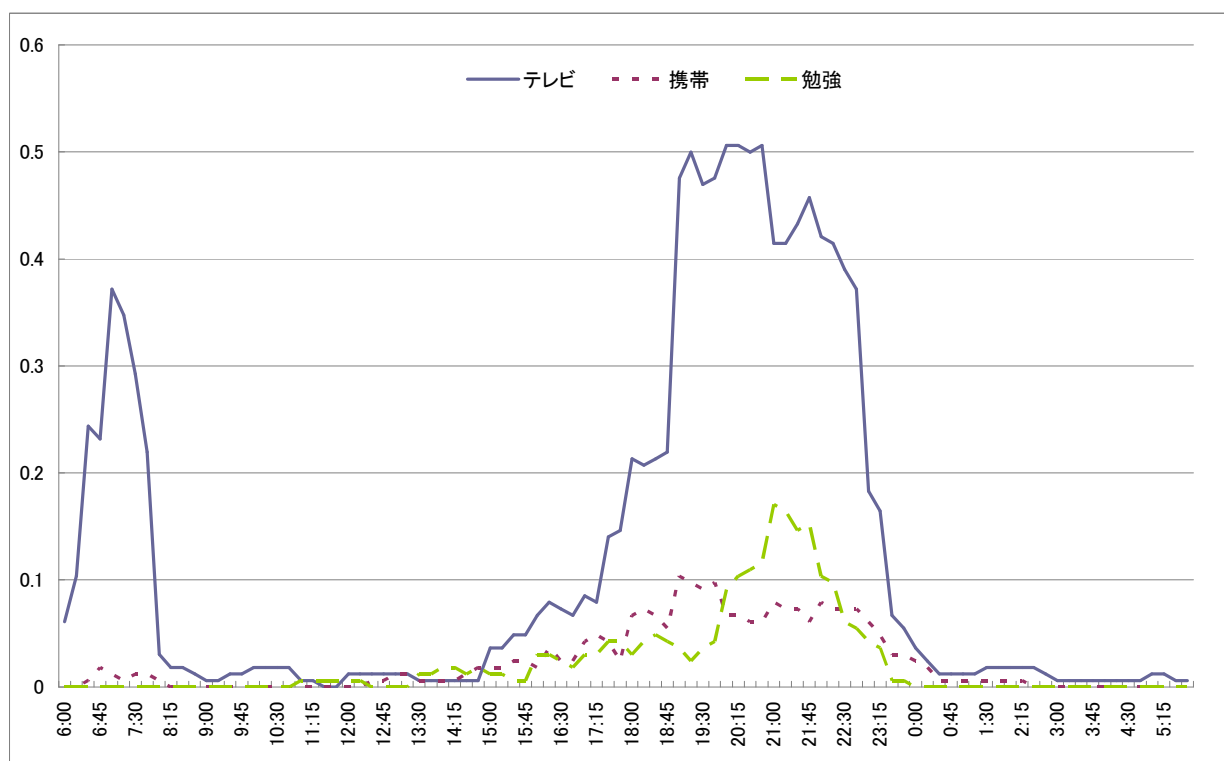


図 5.5.3 時間帯別に見たテレビ視聴・携帯利用・勉強の行為率（%、平日のみ）

6. テレビの信頼性と演出に対する認識

6.1 テレビの占いに対する認識

6.1.1 占いコーナーに対する認識

—まじめに受け取らず、娯楽として見ている

- (1)朝のニュース番組内の占いについては、半数以上の児童が「見たことがある」と回答。ただし、占いの結果(その日の運勢など)が真剣に信じられていることはほとんどない。
- (2)占いを単なる「娯楽」としてとらえた態度がうかがえる。

6.1.2 バラエティー系占い番組に対する認識

—占いの結果よりも占い師の言動が重要

- (1)バラエティー系の占い番組に対する嫌悪も聞かれた。その場合、占いそのものへの嫌悪というより、出演者である特定の占い師の発言・行動に対する非難の意味合いが強いように思われた。
- (2)占いの当たり外れそのものよりも、占い師の発言内容の方を子どもたちは重く受け止める。占い師の言動をテレビでどのように伝えるかについて、制作者はもっと慎重になる必要があるのではないだろうか。

6.2 情報番組に対する認識

—データねつ造は番組ジャンル全体への不信感を強める

- (1)情報番組の場合、親の視聴に引きずられていっしょに視聴するケースが目立った。情報番組を好んで視聴する保護者、とりわけ母親は多い。
- (2)熱心に視聴して必ず参考にしているという、児童からの回答はほとんどなかった。
- (3)情報番組に対する不信感を表明した回答もあった。家族や本人が情報番組をそれまで信用していたことが、より不信感を増大させていると思われる。家族、特に母親が情報番組を視聴していれば、自分が視聴しなくても、情報番組の信頼性は「他人事」ではないからだろう。
- (4)情報番組の場合、自分が信用し実行するかはともかく、その情報内容は真実であって欲しいというのが本音のようである。

6.3 「やらせ」に対する認識

—「やらせ」の知識は親から学ぶ

- (1)「やらせ」という言葉自体を知っているかどうかをインタビューで確認したところ、「知らない」という児童はいたが、ほとんどが知っていた。
- (2)「やらせ」という言葉を知っているかどうかは、主に、大人の視聴者である保護者からの影響が強いようだ。保護者は子どもと一緒に視聴したほうが、テレビの見方を伝達す

る機会を多く持てる。

- (3)「やらせ」があると考えながらも、「おもしろければそれでよい」という肯定的な評価をする児童もいた。
- (4)「やらせ」という言葉は知られているが、「やらせ」に対する批判的意見は少ない。
- (5)「やらせ」については、具体的な判断ができないパターン、あるいはそれも含めて楽しもうとするパターンに分かれるようである。特に、こうした態度は年齢とテレビに関する視聴経験が関係するらしく、後者は中学生の長時間視聴児によく見受けられる傾向である。

6.4 CM 前後の繰り返し

—「番組を途中から見ている人」への「親切な手法」

- (1)半数近くが何らかの不快感を覚えていた。
- (2)好意的な評価をする意見も多かった。「途中から見る人」と「番組内容を忘れた人」にとって親切だからという考えが、好意的評価の根拠となっていた。この演出手法にある程度慣れており、比較的冷静に受け止めていると思われる。

6.5 音響演出と字幕演出

6.5.1 BGM・効果音

—肯定的に受け止められている音響演出

ニュースの BGM 演出やバラエティー番組の効果音演出には、ほとんどの児童が「なんとも思わない」と回答しており、肯定的な意見も多かった。

6.5.2 字幕

—バラエティー番組の字幕演出は「聞き取れないときに」便利

- (1)バラエティー番組の字幕演出については、肯定的な回答が多数聞かれた。肯定的評価の根拠は「聞き取れないとき、意味が分からなかったときの理解の助けになる」というところにある。
- (2)字幕は効果的で良いツールだという認識が、児童の間に広まっているようである。
- (3)字幕によって児童の非集中視聴が促されている可能性もある。
- (4)字幕が児童たちによって称賛されているのは、現在の番組出演者の滑舌が悪く、発話が聞きづらいことの裏返しなのかもしれない。
- (5)消音にする必要があるときに、聴覚障害者と同じような字幕利用をするという児童もいた。こうした用途での需要が広くありうる。

7. 家族内でのテレビの位置

7.1 共視聴の実態

—家族と視聴する小学生、個人化が始まる中学生

(1)「家族といっしょに見ることが多い」という回答は全体の75.0%(27人)であり、子どもたちの多くは、家族と視聴していると言えるだろう。

(2)子どもたちは、中学生になってからは少しずつ視聴の個人化が進んでいく。

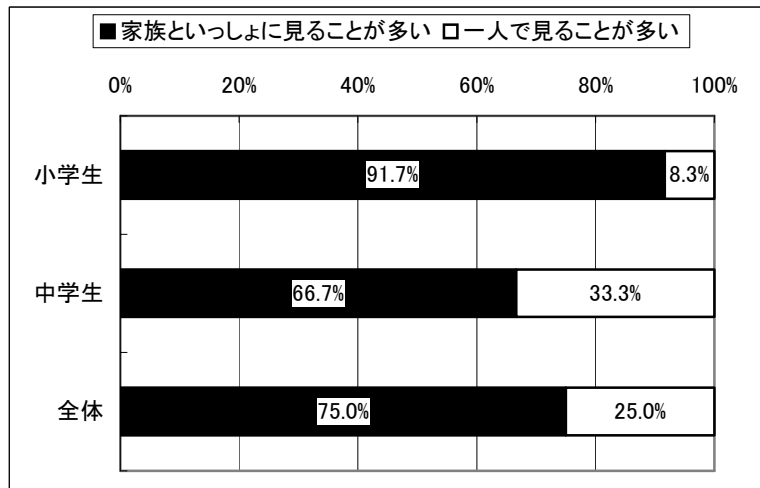


図 7.1.1 家族と視聴するか

7.2 テレビをめぐる家族との会話

—会話は交わすが表面的

(1)テレビを見ながら意見を交わすことがあるかという設問については、「よくある」「ときどきある」「たまにある」を合わせると80%を超える。

(2)テレビに関する会話の内容としては、番組内の情報の確認、番組内容の評価、今後の展開、報道内容などがあつた。

(3)子どもたちは家族とテレビ番組について会話を交わしているが、その内容は表面的な評価や情報の確認にとどまっているようである。

7.3 「家族風景」とテレビ

—一緒にいても別の世界にいる、新しい共視聴のかたち

(1)家庭で家族と一緒にテレビを見ていても、必ずしもそろって集中視聴しているわけではなく、それぞれが「ぼんやり」、「ながら」、「チラチラ」視聴というように集中の度合いは各自まちまちである。

(2)各自がテレビ視聴と同時に従事している行動がばらばらで、それぞれ別のメディアを利用して別のことに携わるといふ、新しい共視聴の場面が報告された。

- (3) こうした状況ではテレビに関する家族間の話題は表層的になっている。
- (4) 各自がケータイなどテレビ以外のメディアを通じて行う外部とのコミュニケーションにおいても、テレビに関する内容の深いやりとりがあるわけでもない。
- (5) 家庭内で共視聴の場を提供しながらも、テレビがもつ家族の求心力は低下しているようだ。

7.4 家庭のしつけとテレビ

7.4.1 夜間の視聴制限時間

—半数以上は深夜視聴の制限に関するきまりがない

- (1)深夜のテレビの視聴制限時刻を、家庭に決められている児童は全体の 36.1%。
- (2)小学生では 58.3%、中学生では 25.0%。中学生よりも小学生の方が、深夜のテレビの視聴を制限される傾向がある。
- (3)軽視聴児童では 41.7%、重視聴児童では 33.3%。重視聴児童よりも軽視聴児童の方が、深夜のテレビの視聴を制限される傾向がある。
- (4)テレビ視聴の制限時刻のきまりがあっても見ているという児童がいた。

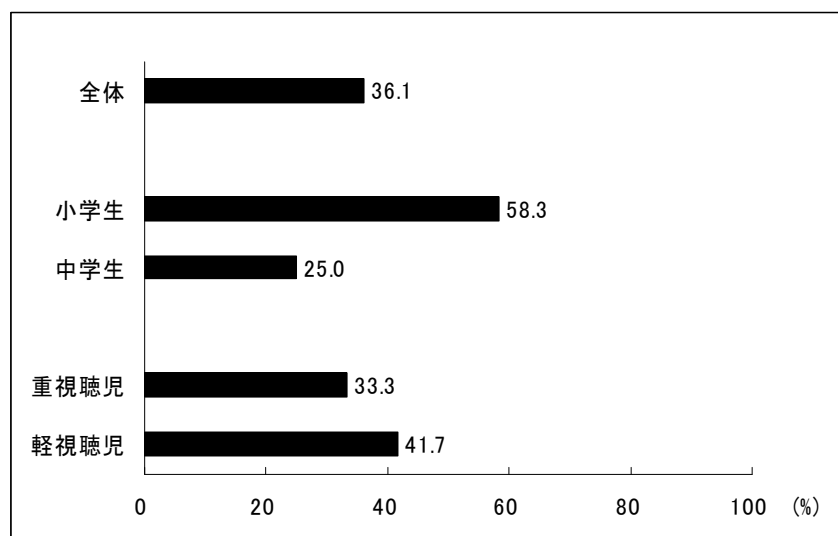


図 7.4.1 夜のテレビを見る時間のきまりがある

7.4.2 テレビ視聴時間に関する注意

—重視聴児童はテレビの見過ぎを注意される

- (1)「テレビをみすぎているから、もうやめなさい」と注意されるのは、重視聴児童の場合、「よくある」16.7%「ときどきある」16.7%、軽視聴児童の場合、「よくある」0%「ときどきある」16.7%。重視聴児童のほうが軽視聴児童よりも、テレビの見過ぎを家庭で注意される傾向が高い。

- (2)「テレビをみるのをやめて勉強しなさい」と注意されるのは、重視聴児童の場合、「よくある」29.2%「ときどきある」16.7%、軽視聴児童の場合、「よくある」16.7%「ときどきある」0%。重視聴児童のほうが軽視聴児童よりも、テレビを消して勉強するようにと家庭で注意される傾向が高い。重視聴児童はテレビを長く見ているので、必然的に注意される頻度が高くなる。
- (3)テレビの長時間視聴が問題だと感じられるようなら、具体的な決まりごとを子どもとあらかじめ約束するという事も考慮すべきであろう。

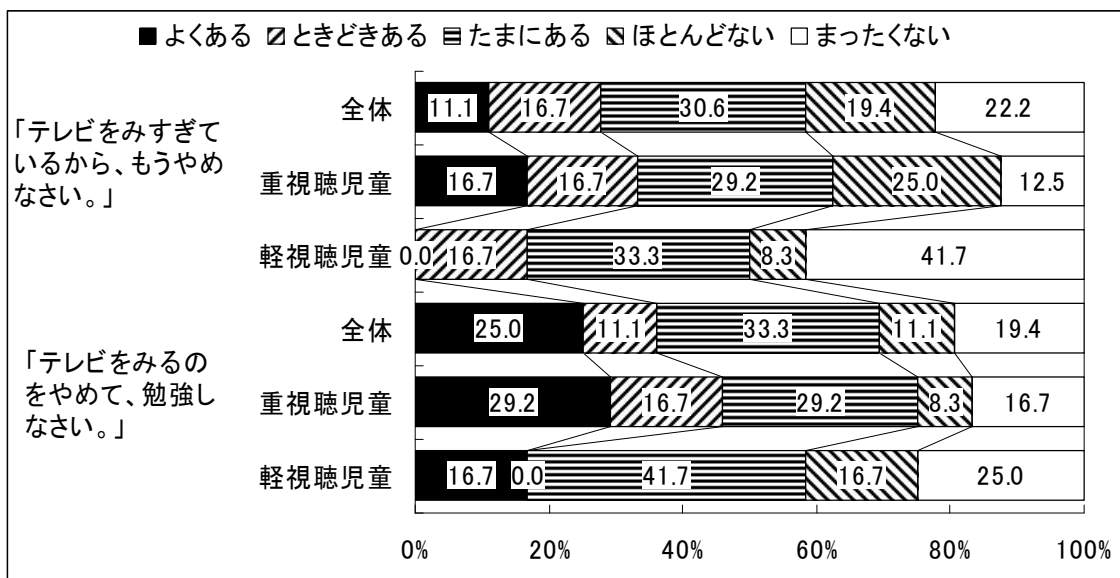


図 7.4.2 保護者から注意されたことがあるか

7.4.3 テレビの音量に関するしつけ

—重視聴児童は音量の上げ過ぎを注意される

- (1)「テレビの音がうるさいから小さくしなさい」と注意されるのは、重視聴児童の場合、「よくある」20.8%「ときどきある」29.2%、軽視聴児童の場合、「よくある」0%「ときどきある」16.7%。重視聴児童のほうがテレビの音量について注意される頻度が高い。
- (2)テレビを長時間視聴していると音量に鈍感になり、そばにいる者に不快感を与えることはあるようである。

8. テレビ番組の影響：主にインタビューから

8.1 暴力的な行動の模倣

—テレビでの暴力にはやや距離を置いた見方

- (1)本人として暴力的な行動を真似るといった回答は全くなかった。
- (2)模倣することに対し、一部の児童はマイナスのイメージを持っている。

(3)暴力シーンは「好きでも嫌いでもない」という回答が一般的。

(4)暴力行動自体については特に強い不快感はなく、またバラエティー番組の罰ゲームなどについても、暴力それ自体が問題であるという意識はあまり見られなかった

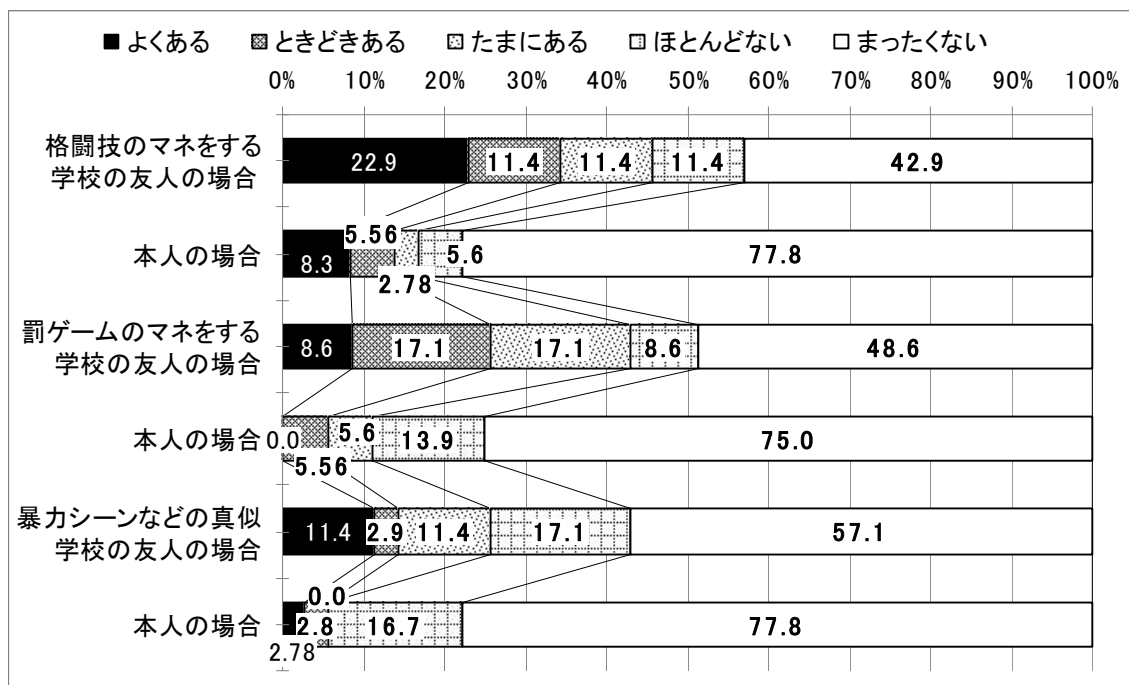


図 8.1.1 暴力的な行動の模倣（「学校の友人」と本人それぞれの場合 %）

8.2 社会環境悪化認識との関連

—いじめも含めて深刻な不安は見られない

(1)「若者の犯罪が増えていると思う」というものが多く見られた。

(2)子どもの世代では治安悪化などがあまり現実味を持って受け取られていない

(3)いじめ自体はあるもののテレビの影響だと言う認識はあまりなく、深刻に受け止められている様子も見受けられなかった。

8.3 性的シーン

—ほとんど視聴経験がないが、目にしたときは家族との気まずさが気になる

ほとんどが視聴した経験がなく、特に軽視聴児童の中にはほとんど見たことがあるもがいなかった。

8.4 まとめ

子どもたちの間では、暴力それ自体がテレビにおける問題となっているという意識は希薄で「冷めた」見方でテレビを視聴している傾向が見られた。

9. CM への関心度

—CM そのものは購買意欲に直結しない

(1)CM について何らかの言及があったとき、大きく分けて二つのパターンがある。

a) CM の演出や出演タレントに関心を抱いた場合。CM の演出・出演タレントが印象に残るようである。好きなタレントが出演していると、CM への関心度も高いようだ。

b) 商品そのものに最初から関心があった場合。彼らは、CM を見る前からその商品に関心があり、その場合は CM の内容も記憶に残るようである。こうした回答をした多くはゲームを好む児童であった。

(2)CM で購買意欲を刺激されはするが、自分のこづかいの範囲内で満足するようである。

(3)CM 自体が購買行動に直接的に与える影響は、ここではほとんど確認できなかった。

10. テレビの空間生態学

(1)現在でもテレビのほとんどが居間・リビングに設置されている。

(2)子どもたちが日々をすごす家庭では、平均して 27 インチ程度のテレビが「居間・リビング」といった集合空間に置かれている。

(3)複数台テレビがある家庭では平均 18 インチ程度の小型のテレビがそれ以外の空間に置かれている。

(4)テレビの配置という側面から見た場合、重視聴児には次の 2 タイプが存在する。

a)受動的重視聴児童

比較的手狭な空間に住んでいるため、テレビがいやでも目に入ってしまう状況にある児童が存在する。彼らは、「受動的重視聴児童」、あるいは「つけっぱなし型重視聴児童」と呼ぶことができる。

b)能動的重視聴児童

重視聴児童の中には、部屋を渡り歩き、積極的にテレビを視聴している児童も存在する。彼らは「能動的重視聴児童」あるいは、「漂流型重視聴児童」と呼ぶことができる。

表 10.2.1 テレビの配置場所

配置場所	台数	そのうち最も大きなテレビ	そのうち2位以下のテレビ
居間・リビング	29	24	5
家族の部屋	12	2	10
和室	7	3	4
寝室	6		6
自室	5		5
キッチン	3	1	2
子供部屋	3	1	2
台所	3	1	2
洋室	3		3
ダイニング	2		2
居間・台所	1	1	
部屋	1	1	

※1 複数回答があった項目のみ

※2 いずれの項目も配置場所が不明なテレビは表から除かれている。

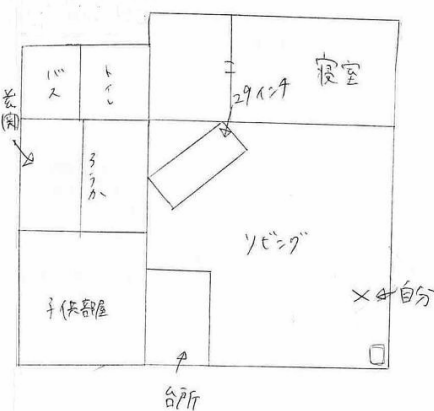


図 10.3.1 ID12の児童宅の見取り図

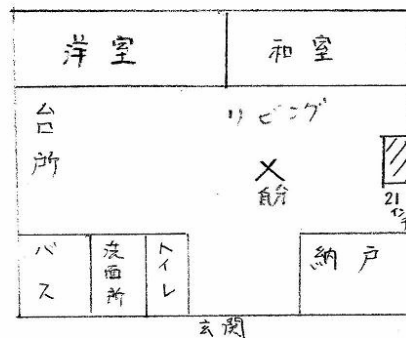


図 10.3.2 ID21の児童宅の見取り図

11. テレビへの期待

11.1 テレビ全般への期待

—ニュースメディア・情報源としての評価

(1)「テレビの良さ」についてインタビューで尋ねたところ、多くの児童が「情報源として役に立つ」点を挙げた。その場合、ニュースを知ることが利点として取り上げられている。

- (2)他のメディアと比較してテレビの利便性・視聴覚情報の良さを挙げた児童もいた。また、知識獲得や学習に役立つという回答もあった。
- (3)目立ったのが、娯楽性を挙げた意見である。重視聴の児童に多く見受けられた。
- (4)テレビが価値観を伝達する機能を持つことを指摘した児童もいた。

11.2 新技術への満足度・期待

—新技術についての認知度・関心は低い

- (1)「デジタル放送」については、既に自分の家で購入したという児童以外には、認知度が非常に低かった。
- (2)「ワンセグ放送」については、名前だけは知られているようであった（特に中学生の間で）。携帯電話でテレビが見られる技術だという理解までしていたのは、36人中15人であった。重視聴児童でも多くは「そこまでしてテレビを見るつもりはない」と考えているようで、全体的に関心は低かった。

12. 終章～けっきょく子どもたちにとってテレビとは何か

終章では、本報告書執筆者の一人、橋元が、調査から見いだされた知見を要約しつつ、テレビと子どもの現状について総括した。主な趣旨は以下の10点である。

- (1)情報環境が複雑化する中であって、テレビの相対的重要性は低下している。とくにテレビよりケータイを「自分にとって大切なメディア」と認識する児童が増加している。小中学生にとっても、もっと魅力ある番組を提供する必要があるとともに、ケータイを通してインタラクティブに楽しめる機能を盛り込んだ番組作りも考慮すべきである。
- (2)テレビ局は、夜の11時前後でもテレビを視聴している小中学生が少なくないという実態をしっかりと認識する必要がある。
- (3)テレビ視聴時間は、主に、通塾やクラブ活動への参加とも関連する在宅時間、家族の視聴時間、家庭内におけるルールの存在によって大きな影響を受ける。
- (4)とくにバラエティ番組について、児童はさほど集中して視聴していないという傾向が見られる。視聴率と集中視聴度との間には関連がなく、必ずしも高視聴率番組が「おもしろく、熱心に」見られているわけではない。「ながら視聴」に関しては、ケータイを利用しながらテレビを見る、というケースが多々見られた。
- (5)暴力的シーンに関して、児童は「テレビ上のこと」として、やや距離を置いた見方をしており、少なくとも自分が影響を被っているという意識は薄い。いじめや犯罪報道の影響についても、「影響を受ける人はいるかも知れない」としつつ、自分とはあまり関係のないことと見なす傾向がある。
- (6)情報番組等について、提供される情報を無条件に信じ、それを生活上で実践する、とい

った児童はほとんどいない。しかし、ねつ造事件にはショックを受けた児童もおり、テレビ全体に対する信頼を回復するのは急務である。いわゆる「やらせ演出」に対しては、具体的に番組批判をする児童はほとんどおらず、「テレビの約束事」として割り切って見ている児童も多かった。CM前後に番組内容を繰り返す手法や、発言に字幕をかぶせる手法についても、批判的な児童はむしろ少数であった。ただし、それらの手法が、非集中視聴を助長している側面はありうる。

- (7)友人との間でテレビが話題にされる、という状況は変わらない。しかし、友人との会話についていくためにテレビを視聴するというケースや特定の番組を見ていないから会話に加われないというケースはほとんどなかった。話題提供といった側面で、テレビ番組の求心力は低下しているようだ。背景の要因として、子どもたちの関心の多様化や、今後の展開が話題になるような魅力ある番組が少なくなっていること等が考えられる。
- (8)テレビを家族と視聴するという児童は依然多い。しかし、番組内容について話を交わすことは少なく、視聴する家族のそれぞれが他メディアを利用しつつ並行視聴するという光景が多く報告された。
- (9)テレビに対して具体的な不満を述べる児童は非常に少なく、またテレビをめぐる新技術に関する知識にも乏しかった。テレビに関する技術革新の有益性・魅力をもっと活発に宣伝する必要がある。
- (10)他メディアとの比較で、テレビの相対的重要性が低下しつつあるという傾向はあるが、消費時間量から見れば、やはりテレビはメディアの中心であり、将来的にも他メディアで置き換えられるという事態は考えがたい。テレビ制作者は、改めてテレビという存在の大きさや影響力を認識し、今後も、より魅力的で児童にインパクトをもつ番組を提供し続けてほしいというのが調査にかかわった我々の願いである。

終章～けっきょく子どもたちにとってテレビとは何か（報告書全文）

今回のインタビュー調査およびそれに伴うアンケート調査、日記式調査を通じて、「子どもとテレビ」に関し、我々が言えることを以下にまとめる。なお、ところどころデータを逸脱した主観的見解を述べているが、その部分については本章筆者(橋元)の個人的意見にすぎない。[文中(x.x)は、本報告書で関連する章・節ナンバーを示す]

(1) 子どもをめぐる情報メディア環境の変化

ーテレビは情報メディアの“one of them”である

まず、今回の調査で改めて確認できたことは、以前に比べ、子どもたちをめぐる情報メディア環境が劇的に大きく変化したという事実である。

調査対象の61%が携帯電話を利用していた。中学生について言えば、3分の2が利用していた。別の調査では都内中学2年生の75%が利用しているという数字もある。しかも、携帯電話利用者の全員がケータイ・メールを駆使し、また情報サイトにアクセスしていた。

パソコンの利用は92%に及び、パソコンによるインターネット利用率も81%であった。中学生に限定すると、その数値は90%に上昇する(1.1)。

数年後には、学校での利用も含めると、小学生でもパソコンによるインターネット利用率は100%に達するだろう。携帯電話についても、利用開始時期がさらに低年齢化し、都市部中学生ではほぼ100%が利用する時代が来るだろう。

パソコンやケータイでもテレビを見ることができると、いう状況は別にして、それらが独自に提供する個々の情報コンテンツが、児童にとっての魅力度においてテレビ番組を凌ぐものとなるかどうかはわからない。しかし、「時間の消費」という側面で見れば、メールやゲーム、音楽、小説等、様々なアプリケーションやコンテンツ受容を総合すると、すでにテレビを脅かす「時間剥奪メディア」になりつつある。

かつてテレビはニュースの情報源であり、同時に気晴らし・娯楽の最大の手段であった。今や、ある程度まではケータイやパソコン・ネットがそれに代替されうる。調査では、「ケータイがあればテレビは不要」という声も聞かれた。実際、調査結果から、すでに中学生、男子、ケータイ利用者では、「大切なメディア」としてケータイがテレビを凌いでいる(1.2)。とりわけ、ケータイ利用者の3分の2が一番大切なメディアとしてケータイをあげ、テレビを選んだのは3分の1弱に過ぎなかったという数値は大きな意味をもつ。

テレビを一番大切なメディアとして選んだ児童についても、積極的な理由が聞かれなかった点も重要である。多くは、「ケータイはもっていないから」「他に選ぶメディアがないから」というもので、「テレビが無くては困る」という意見はあまり聞きだせなかった。

テレビの視聴は慣習的な側面をもっている。習慣的にテレビのスイッチをいれ、背景音

楽のようにテレビの音声を耳に入れ、熱帯魚の水槽を垣間見るように、変化する映像をときおり漠然と眺める、という人も少なからずいる。その種の機能はケータイでは代替が難しい。テレビの大画面化が進む今、そうした役割は今後もテレビの独擅場であるかも知れない。しかし、情報を収集したり、娯楽的コンテンツに時間を忘れていたりする、といった側面では、ケータイやパソコンでも部分的に代替可能になってきた。通信機能も含めれば、テレビがなくても時間はつぶせる。そうすれば、「まずはともあれテレビのスイッチ入れる」という習慣をもつ児童の比率も下がっていく。一旦失われた習慣を回復するのは容易ではない。今の小中学生は10年後のF1、M1なのである。

そのような時代にあって、児童における重要性をキープし、また視聴時間を担保し続けるにはいくつかの方向性が考えられる。まず、視聴ターゲットを細分化し、ケータイに負けない、小中学生の興味を引きつける番組を強化し、テレビの視聴習慣を維持し続けさせること。その際、テレビの大画面性や画像の鮮明さ、アクティブに選択しなくても次々と多彩なコンテンツが画面から流されてくる「ものぐさのお気楽性」、なんでもありの「総花性」といったテレビの特性を活かした番組作りが重要であろう。総花性はある意味で現在のテレビでも充足されている。それに飽き足りない子に対して、(幼児や青年向けでない)小中学生が没入できる番組発信をする必要がある。

第二の方向性は、むしろネット等との連携を強化し、マルチメディア視聴環境の造成に積極的にはげむこと。つまり「ながら」に耐え、「ながら」しやすく、他メディアを利用しつつもテレビのスイッチを入れておかざるを得ない番組を数多く提供すること。現在でもインタラクティブな機能を盛り込んだ番組は放映されている。しかし、現実にはテレビのインタラクティブ機能を活用する人は少数である。インタビューからの印象では、児童が望んでいるのは、テレビの中でのインタラクティブ性ではなく、片手で操作できるケータイを駆使したインタラクティブ機能ではないだろうか。今回の調査でも、テレビ視聴時間が長い児童ほど、ケータイの利用時間が長いという結果が示されている(2.3)。また、テレビとの同時並行行動で実際、最もよく行われているのが携帯電話の利用である(5.5)。ケータイはテレビにとってライバルではなく、時間的にも共生可能な相補メディアである。

(2) 夜11時前後でもかなりの児童はテレビを視聴

—ただし、とくに性的関心はそそられず

今回、日記式調査でテレビを見る時間帯についても調べている。我々の調査では、夜10時45分から11時の時間帯で小学生の20%、中学生の46%、11時から11時15分の時間帯で小学生の5%、中学生の25%がテレビのスイッチを入れていた(2.2)。現在の日本のテレビ番組では大人向け、児童向けというようなレイティングがされておらず、また時間帯についても年齢層による明確な区分はない。しかし、ドラマやバラエティー等の現実の番

組内容を概観するに、おおむね夜 11 時を過ぎれば、少々セクシャルなシーンや会話が許容されるという暗黙の了解があるような印象を受ける。調査結果から示されるように、実態としては夜 11 時前後でも、かなりの比率の小中学生がテレビのスイッチをいれている。性的シーンが児童に及ぼす影響の議論はともかく、番組制作者は、夜 11 時でもテレビを見ている児童が少なくないことをしっかり認識しておく必要がある。

ただし、「性的な(エッチな)シーンを目にすることがあるか」という質問に対しては、ほとんどが「見たことがない」と答えていた。「性的」と感じるかどうかは主観的な問題であり、ネットの普及等、多様化した情報環境下で、子どもたちにとってテレビの性的場面などは、もはや刺激をそそられる対象にはなり得ないのかもしれない。

(3) テレビ視聴時間は生活環境による

視聴時間に関して、今回の調査からもこれまでに実施されたいくつかの量的調査の結果を追認できた。

まず、テレビの視聴時間に大きな影響を及ぼしているのは、通塾や習い事、クラブ活動等から物理的に制約を受ける在宅時間である(3.1)。在宅時間が短ければ、必然的にテレビ視聴時間は短くなる。少子化で 1 人あたりの子どものかける教育投資が大きくなるにつれ、平均的に見て、今後もますます学校・自宅外での学習時間は長くなると考えられる。それにつれ、小中学生においてもテレビ視聴時間は減少していく可能性がある。しかし、今回の調査で見えたことの一つは、たとえば塾に通っている児童がすべてテレビを見る時間が短いかといえは必ずしもそうとは言えず、塾に通っていても、(自己報告ではあるが)成績のよい児童ほど、結構、テレビをしっかり見ているという傾向である。要は時間のやりくりであり、時間管理のしっかりした児童は、それなりにテレビ視聴時間もキープしている。

また、今回、テレビ視聴時間は家族のテレビ視聴時間と大きく関連していることも確認できた(3.2)。さらにテレビ視聴に関する一定のルールが存在も児童の視聴時間に影響していた。常識的に推測できるように、家族のテレビ視聴時間が短いほど、視聴に関する家族内ルールがあるほど、子どものテレビ視聴時間は短くなる。子どもにテレビをあまり見せたくなければ、家族、とくに母親がテレビ視聴時間を短くすればいいし、家庭の中でテレビ視聴についてきっちりルールを定めることが必要である。ただし、前述したことも関係するが、単純にテレビを見る時間を短くしたからといって、成績が上がるというわけではないのは言うまでもない。

(4) 非集中視聴と視聴率、「ながら」

—「おもしろいから見ている」とは限らない

今回、ジャンル別に見て、最も児童によく視聴されているのは「バラエティー」であった(4.1)。番組ごとの接触件数でも上位を占めたのはバラエティー番組である。ことほどさようにバラエティーは魅力的なのだろうか。

今回の調査では、実際の番組をどのように熱心にみているか、番組ごとに集中視聴の程度を詳しく尋ねているのが一つの特徴となっている(「視聴スタイル」、5章)。その分析によれば、バラエティー番組は、食事中などに「ながら」で見ることの多いニュースなどと並んで集中視聴度は低かった(5.2.2)。視聴率との関連でも、バラエティーの場合、視聴率と集中視聴度とはほとんど無関係であり、よく見られているからといって、児童が熱心に見ているわけではないことが明らかにされた(5.3)。インタビューでは「バラエティー番組はちらちら見ても内容がわかる」「好きな芸人が出たときだけ見る」という声もしばしば聞かれた。

バラエティーの主な機能は「娯楽」「気晴らし」である。「もとより、熱心に集中して見られることを想定していない」という現場からの声も聞こえてきそう。一方で、制作側が番組を作る際に依拠する最も大きな指標は「視聴率」にあることも事実である。どこかに「視聴率を取っているから視聴者の支持を得ている」という思いがありはしないか。しかし、その「視聴率」は、質の高さはもとより、視聴者の満足を反映する指標ではない。今回の調査で、少なくともバラエティーに関しては、視聴率が、熱心に見られていることの反映ではないことが示された。娯楽、気晴らしが主機能のバラエティーであっても、本来、番組内容がおもしろければ、子どもたちはもっと熱心に見るはずだと考えるのが常識だろう。一部の芸人だけを目当てに、「チラチラ見」で済まされる現状に制作者は満足しているのだろうか。視聴率という数字に振り回される中で(それが仮に「たかがお笑い」であったにしても、否、お笑いであるからこそ)、視聴者が本当におもしろいと思い、没入する番組を作ろうという気構えが、どこかに置き忘れられつつあるのではないか。あるいは気構えが空転しているのか。

また、(1)でも少し言及したが、今の児童のテレビ視聴スタイルの大きな特色は食事等、他の生活行動との「ながら」だけでなく、マンガやゲーム、ケータイ等、他メディアとの並行行動が多いことである(5.5)。アンケート調査だけでなく、日記式調査によってもそのことは数値として確認できた(5.4.2)。日記式調査によれば、メディア利用行動では、携帯電話との並行行動が最も多かった。こうした他メディアとのながら利用行動が多いことが、非集中視聴の多さに繋がっているとも言えるが、他メディア利用と並行視聴しているから非集中視聴になるのか、そもそもテレビの内容がおもしろくないから他メディアをながら利用するのか、その方向性は不明である。

(5) 暴力シーン、犯罪報道の影響

—「テレビはテレビ、何てことはない」

今回の調査の目的の一つは、BPOに寄せられる視聴者意見でよく問題にされる「暴力シーン」を子どもたちがどのように感じているかを探り出すことにあった。「児童に悪影響」とはよく言われるものの、当事者の児童はどのように感じ、実際どのような影響を受けているのだろうか。

「暴力的な行動の模倣」で言えば、本人がよくするというケースはほとんど見いだせなかった(8.1)。ただし、学校の友人に関して尋ねれば、「よくある／ときどきある」で罰ゲームのマネが26%、暴力シーンのマネが14%あると答えた。自分はマネをしないが、クラスには中にはマネをする子もいる、という常識的な答えである。インタビューで聞き出す限り、「くだらない」とは思うものの、迷惑を被っている、という意見は少なかった。

ドラマなどの暴力的シーンについては、多くの子が「好きでも嫌いでもなく」、強い不快感は感じない、という声が大勢を占めた。バラエティーの罰ゲームに関しても、「好きではない」という子もいたが、概して「何とも思わない」という意見が多かった。子どもたちは、大人ほど暴力的シーンに敏感ではないようだ。

そうした番組内容が同世代の児童に悪影響を及ぼすものか、それについて児童の意見を聞き出したかったが、大半のケースではっきりとした答えは得られなかった。そもそも暴力的シーンについて、どこが問題になるのかピンとこない子が多かったからである。「暴力シーンに過剰接触するうちに鈍感になり、周りで発生する暴力にも無反応になる。ひいては、問題解決の手段として、自らも暴力を選択する可能性が増す」とは、マスメディア研究でいう「脱感作作用」である。インタビューで印象づけられたのは、「鈍感化」「脱感作」というより、単に「テレビ上のワンシーン」として、現実とは区別してみている児童の態度であった。

「報道と犯罪やいじめ等との関係」について、まず、多くの子は「最近、いじめや若者の犯罪が増えている」という認識をもっていた(8.2)。この認識には報道が少なからず影響しているだろう。「模倣犯罪」も含め、何人かの子が漠然と「テレビの報道の犯罪発生への影響」についても触れていた。しかし、具体的な番組との関連について言及する子はなく、またいじめや自殺問題についても特定の報道に関する意見はなかった。犯罪や事件そのものが、インタビューした児童には、自分に関係する深刻な事態とは受け取られていないようだ。「他人には影響はあると思うが、自分には影響はないと信じる」—マスメディア研究でいう「第三者効果」が児童にもあてはまりそうだ。

(6) 演出には冷めた目

— 「響きと怒り」に満ちてはおらず

今回、「情報番組」の信頼性をどう評価しているかをインタビューで尋ねている。多くの児童は自分から積極的にではなく、親につられて見ているというケースが多かった。それらの番組を親が熱心にみて、番組で紹介される情報を真に受けているケースが多いのに対し、多くの子どもたちはむしろ「娯楽番組」として眺めているようにすら思えた。とはいえ、「あるある大事典問題」は一部の子どもにはショックを与えたようだ。それまで信用していたが、この事件を契機に同種の番組すべてが「信じられなくなった」という意見も聞かれた(6.2)。これまでの調査(たとえば筆者の関連するものでは World Internet Project による国際データ比較や日韓比較をした『調査からみたネット利用、対人関係、社会心理の日韓比較』,橋元他,2004)によれば、日本は国際的にもテレビ情報に対する信頼度の高い国である。少なくともニュースに対する信頼は群を抜いている。「あるある」のような事件が繰り返されれば、「情報番組」に対する不信感がニュース番組に対する信頼にまで波及するおそれもなきにしもあらずである。

バラエティー番組などについて言及される「やらせ」に関しては、言葉としてはほとんどの子が知っていたが、具体的に番組批判をする子はごく少数にとどまった(6.3)。一部の子は、具体的な判断ができず、また別の子は、むしろ「バラエティーだから」と割り切って、娯楽として楽しんでいるようにも見えた。ある意味で今の子は「テレビの約束事」を熟知しているのかもしれない。

「CMの後の繰り返し手法」については、意見が分かれた(6.4)。しつこい、じれったい、と感じる子がいる一方で、「親切」「内容が確認できて良い」、という意見も聞かれた。とはいえ、違和感やくどさを感じる子どもにおいては、結果的に間に挟まれたCMの商品宣伝効果をおとしめている可能性がある。また、そのような手法が、より一層、CMに対する「余計なもの」意識を増長しかねない。

通常バラエティーなどで音声に字幕をかぶせる手法に対しては、多くの子が「わかりやすい」と評価していた。テレビの新しい演出手法に対しては、児童は大人よりもスムーズに順応し、あまり違和感を感じないようだ。ただし、その種の手法は、ますますテレビの散漫視聴を助長している側面がありはしないか。どうせ繰り返してくれるから、集中して聞かなくても字幕で補ってくれるから、と番組に対する集中心を削いでいる部分もあるような気がする。情報はなんでもかんでもわかりやすければいい、というものではない。聞き取れない部分、ミステリアスで終わる部分に想像力をふくらませて内容は豊かにもなりうる。

(7) 話題性

—話題提供の求心性はなくなった

今回の調査に先立つプリテスト的インタビューから、我々は「テレビはもはや友人との会話で話題に上ることが少なくなった。すなわち、友人との共通の話題提供機能が低下したのではないか」という仮説を立てた。本調査の結果は、この仮説に関し、かなりあいまいである。アンケート調査で「よく見る番組を視聴する理由」をあげてもらったところ、「友だちとの間で話題になるから」は32%の回答比率であった。この数値だけからは、友人との話題になることが多いとも少ないとも言えない。インタビューでそのあたりを質問したところ、「友人との会話でテレビのことが話題になる」という児童も少なからずいた。インタビューの印象では、まだまだテレビは話題提供機能を維持している。しかし、さらにつっこんで「特定の番組を見ないと友人との話についていけないことがあるか」「話についていけないからという理由で番組を見ることがあるか」と尋ねたところ、そもそもテレビの話題についていけなくても不自由を感じないと答えた児童が多かった(4.5)。

概して、今の小中学生は、話題も分化しており、「テレビを見ないと話題についていけない。だから見る(見ざるを得ない)」という状況は少なくなっている。

その原因として、(1)娯楽情報源が多様化したこと、(2)興味・関心自体が多様化・分化していること(全体的な「話題」という意味でも、「視聴するテレビ番組」という意味でも)、(3)一般的に政治や社会的事件に対する関心も低下していること(政治問題等はもちろん、社会的事件が頻繁にテレビで報道されても、それも話題になることは少ない)、(3)日常的にケータイ等でコミュニケーションをとっているため、あえて話題の求心力をテレビに求めてそこから話を展開する必要もないこと、等が考えられるが、テレビ側の要因として、(a)話題になるほどの題材が最近あまり提供されていないこと(とくに小中学生を夢中にさせるアニメ、ドラマが少なく、スポーツなども共通して青少年の関心を惹くものではない)、(b)ドラマやバラエティーの連続企画物で「これからどうなる」という展開の妙・期待を感じさせるものが少ないこと、(c)番組自体があまりに完結的でわかりやすすぎ、視聴後にさらに話題にしようという気を削ぐ傾向にあること、等のこともある。たとえば、既述したように、近年とみに多用されている、発言内容の字幕化や展開の要約的繰り返し手法などは、確かにわかりやすさに貢献しているかも知れないが、番組内容に対する興味をその時点で自己完結させてしまい、自省的に内容を再考したり、人と解釈をめぐって話し合おうとしたりする可能性すら奪っているのではないか。

(8) かつての「団らんの絆」

—基本は居間で家族と。でも「リビングルーム・ディアスポラ」

今回の調査で確認できたことの一つは、まだまだ児童は家族といっしょに見ることが多

いという事実である（7.1。小学生は92%、中学生は66.7%）。調査対象児童の36人中居間にテレビが置かれているのが28家庭、そのうち24台は家で最も大きなテレビ（11.2）というのが日本の家庭の現状であれば、狭い日本家屋で、必然的に家族とテレビを見ることも多いだろう。物理的にはテレビはまだまだ家族の「団らんの絆」である。一緒にテレビを見る家族との会話も思ったよりはよくされている（7.2）。しかし、会話の内容はかなり表層的であるようだ。番組内の情報の確認や番組の簡単な評価が多く、内容についてつっこんで語り合う姿は見いだせなかった。と同時に、インタビューで明らかになったことは、場を共有してテレビを見ていても、それぞれが別のことをしている家庭が多いことだ（7.3）。マンガ、ゲーム、パソコン、ケータイと、それぞれが他メディアとのながらでテレビを視聴しているケースが多く見られた。とくに印象に残ったのは、携帯メールをしながら家族と共視聴、というスタイルである。一つのテレビの前に座っていても、家族のそれぞれは外部のネットワークと結びついている—これでは「団らんの絆」どころか、「リビンググループ・ディアスポラ(離散)」である。

(9) 今の子には、テレビに対する不満も、新技術に関する期待もあまりない

今回のインタビューでは、予想以上にテレビの現状に関する不満や期待の声が聞こえてこなかった。軽視聴児童においても、「テレビはつまらない」とか「番組がくだらない」とかいうストレートな意見はほとんどなかった（3.4.3）。また、テレビの新技術については、総じて知識も乏しく、多くの児童は無関心であった（12.2）。多くの児童がケータイを頻繁に使っている一方で、ワンセグ放送をよく見る子は皆無に近く、それが何を意味するのか知らない子さえ多くいた。デジタル放送に関する知識にも概して乏しかった。

これらのことを裏返して言えば、今の児童にとって、テレビは初めからそれほど期待をもって接する対象でもなく、また技術革新もさほど大きな意味をもっていないということである。もし、テレビ制作者が、将来的に新技術のメリットを有効に生かした番組作りを進め、テレビの魅力をさらにアピールしたいのであれば、テレビに関する技術革新の有益性・魅力をもっと活発に宣伝する必要があるのではないか。

(10) 「裸の王様」テレビ？

—陳腐ですが「たかが、されど」

以上、児童の生活においてテレビの重要性・他メディアに対する優越性が低下してきたこと、非集中視聴が常態になりつつあり、とくにケータイ等との並行視聴が多いこと、家族の団らんの絆とは言い難いこと、等を述べた。さらに、かつてのように友人との話題の中心ではなくなってきたことも示唆された。

しかし、今回の調査で、調査対象者の平均視聴時間が3時間を超えていたのも事実であ

る。学校や塾などで忙しく、在宅時間が5時間そこそこの今の児童にとって3時間は大きな割合を占めている。平均値で言えば、他メディアで行為時間が長いのは携帯電話利用であるが、それも平均44分と、テレビに比べ格段に時間は短い（ただし、行為者平均時間が140分というのは脅威である）。時間量から言えば、やはりテレビはメディアの王様たる地位を維持している。

新技術に関する期待はあまりもっていないと述べたが、それでも「情報源として役立つ」「情報がわかりやすい」「画面が大きく見やすい」「勉強になる」「楽しい」という意見も聞こえてきた(12.1)。いくらケータイの存在感が増してきたと言っても、やはりテレビが無くては寂しいという子も依然多く存在するのである。

「一億総白痴論」(1957年、大宅壮一)を待つまでもなく、テレビが家庭に侵入してきた当初から、ある意味でずっとテレビは「諸悪の根源」視されてきた。新しいメディアを嫌悪する「ネオ・メディア・フォービア」は、テレビの場合、現在でも続いている。それにもかかわらず、日本ではこの60年以上、テレビ視聴は行為時間量の大きいメディアとしてダントツの地位を保ち続けているわけであり、またこの先も相当期間、その地位に揺らぎはないだろう。やはり別格の「王様」として認めざるを得ない。今回の議論からははげれるが、著作権等の関係からネットでは厳しくコンテンツ配給が制約を受ける日本のメディア状況や、世論形成や消費生活への影響なども考えれば、総合的に見て、やはり他と比べようのないほどテレビの存在は大きい。

だからこそ、うつろな視聴率や目先の評判などにとらわれることなく、10年20年先に日本を担う子どもたちのために、心の糧、礎となる魅力的な番組づくりをしてほしいと願うものである。